１９９４年度第１学年第１回全体学習公開授業・部落問題学習指導案（板野中学校１年Ｂ組）

１９９４年５月１９日（木）

授業者　　森口　健司

１　主　　題　　差別解消の主体者として

２　主題設定の理由

本年度初めて１年生を担任する。学年始め、学級開きの日は格別の思いで迎えてきたが、今年の４月はかつて経験したことのないような胸の高鳴りがあった。４月１１日の入学式の日、ニコニコしながら登校してきた生徒の姿と、同じ日に小学校に入学した娘の姿が重なる。一人一人の胸の中に秘められた不安や期待が手にとるように伝わってくる。新しい制服、新しい鞄、私の娘が胸弾ませて小学校への入学準備をした場面がよみがえってくる。この生徒たちの背後には、この子らの幸福を願い続けている家族がいること、そしてこの子らは板野中学校へ本当の幸福をつかむために入学してきたんだという思いで生徒一人一人を迎えた。

やがて１年Ｂ組３２名全員が揃い入学式が行なわれる体育館への入場を待つ、緊張しながらも笑顔に溢れる生徒の姿を見つめたとき、この生徒たちと板野中学校をよりすばらしい学校にしていき、この生徒たちと共に部落差別を始めとする様々な差別を解消していく教育実践を積み上げていくんだという決意がわきおこってくる。私にとって新たな挑戦が今日始まったという思いであった。

入学式の後、初めての授業・学級指導があった。私は小学校生活とこれから始まる中学校生活の両方が見える峠に立った生徒の思いに寄り添いながら、詩「峠」（真壁仁）を語った。毎年毎年学年始めに語り続けてきた「峠」であるが、今年の「峠」にも熱いものが流れていく。そして、生きることの意味、板野中学校という今最も輝く中学校へ入学してきた事実をしっかりと受け止めさせていく。やがて入学式に参加していた保護者が教室に入ってくる。すべての保護者に教室に入ってもらった。３２名の生徒たちはすっぽりと保護者に囲まれた形になる。私はその場で私の思いを精一杯語っていく。生徒の生命を輝かせてきた部落問題学習の実践について、その中で私自身が人間として解放されてきたことについて、私は３２名の生徒たちとその保護者への信頼と尊敬の思いの中でこれから営まれていく教育の本質について語っていった。

出会いの日、私の話を身体全体で受け止めるようにキラキラ輝いた眼差しを送ってくれる32名の生徒と保護者に胸を熱くすると同時に、心地よい緊張感と大きな喜びを感じていた。そんな期待を一身に受けて１９９４年度がスタートした。

一人一人の生徒たちの可能性を開花させていく毎日でありたいと思う。しかし、様々な状況で喘ぎ苦しんでいる生徒の姿がある。こんな状況があってたまるかという状況の中でくじけそうになりながらも笑顔で登校してくる生徒、これからの３年間もっともっと厳しい状況に立っていくかもしれない。でも決して自分をあきらめない生き方をさせていきたいと思う。そんな教育を実践していくことがすべての生徒たちの生命を輝かせていくことだと思う。そのためにも生徒一人一人の生き抜く力となりうる部落問題学習を実践していきたいと思った。

生徒たちが中学に入学しての初めての道徳の時間、「そんな教室つくろうや」という作品について語り合った。戸惑いを感じながらもすべての生徒たちが堂々と自分の思いを語っていく。本当の思いをみんなの前で表現することの苦しさ、その苦しさを乗り越えて本当の思いを語れた喜び、その授業で生徒たちは道徳の授業や部落問題学習のあり方をつかんでいく。その翌日の生活

ノートにはその授業への溢れるばかりの思いが綴られていた。生徒たちは心の底に様々な痛みを引きずりながら学校へ登校し、頑張ろうとしていることを今さらながらに実感する。自分の思いを語ること、発言することへのこだわりや、中学校で頑張っていこうとする思いが綴られた生活ノートのいくつかを紹介する。

《今日は道徳の時間のことが一番心に残っています。「そんな教室つくろうや」という詩でした。その詩には自分と当てはまる部分がたくさんありました。間違えることが恐くて恐くて答えられないまま時間が過ぎる。それとか発表できても一人か二人か先に発表しくれないと、発表することができなかったけど、この詩を読むと間違えたって恐くない。みんなを信じたい。自分の気持ちを素直にすらすら言うんだという感情がこみ上げてきます。それに自信がつきました。道徳の時間は何回も発表できました。１回目発表するときはドキドキして真っ赤になったけど、２回目、３回目はけっこうすらすら迷わず思ったことが言えました。自分でも安心して落ち着きました。今日は少しでも自分を尊重できたかなとうれしく思います。この詩に感謝します。今日からはスッと楽になり仲間をよりいっそう信じれるようになり、発表もドンとこいという感じで頑張ります。それと今日は発表をあまりしない子もみんなハキハキ言えて私は感心しました。発表することによってその人の考え方、性格、志などいろいろなことがたくさん見えてきました。これからはもっと十分に分かり合えると思います。精一杯力を出しきって、１Ｂを明るく楽しく仲よく全員が感心するくらいすばらしいクラスにしていきたいです。そのためにはみんなが頑張らなければならないと思います。みんなすばらしいところがいっぱいあるのでそのことを大事にしあいながらみんなで頑張っていきたいです。》

《今日の道徳の時間に「そんな教室つくろうや」という勉強をしました。はじめ題を見たとき何のことかなあと思いました。でもその道徳の授業で僕は勇気というものが与えられたような気がします。今まで小学校の頃は自分に勇気という２文字がなくて、その答えがわかっていても僕は、「間違えたらバカにされるなあ、みんなに笑われるなあ」そんな気持ちがあったから僕はほとんど手を挙げて発表していくことができませんでした。でも今は違います。この「そんな教室つくろうや」という詩に出会って、勇気を与えてくれたから、答えが間違っていてもわかっていればドンドン手をしっかりと挙げて発表していきたいです。》

《今日道徳の時間に「そんな教室つくろうや」という詩を読んだ。小学校のときに読んで話し合ったことがある。私は小学校の頃は発表が苦手で、自分の言うことにもあまり自信がなかった。話し合ったときに「頑張りたいです」とか言ってもあまり変わらなかった。でも今度こそ自信を持って変わっていきたいです。今日も自分の意見を言ったらすっきりしました。この詩の中にもあるけど、「いつも正しく間違いのない答えをしなくちゃならんと思って、そうゆうとこだと思っているから、間違うことがこわくてこわくて、手を挙げないで小さくなって、黙りこくって時間が過ぎる。」私はいつもこういうふうに授業を受けていた。言いたいことがあってもなかなか言えなかった。いつも授業が終わった後は「しんだいなあ」って思うだけだった。でも言えたときはすごくうれしかった。だから小学校のときのように黙っているばかりじゃなく、自分の言いたいことは言っていくようにしたいです。それと私がもう一つ思ったことは、人が間違っても笑ったりしないようなクラスを作っていきたいと思った。明るいのはいいけれど、誰にでも間違いはあるし、笑った子は楽しいしおもしろいかもしれないけど、その子にとってはすごくショックで傷つくだろうから、間違っても笑わずに「間違っているよ」とか言ってあげれるようにして、もし誰かが笑っても、「笑わんでもいいでえ」って言ってあげれるようなクラスにできたらいい

のになあって思います。こんな教室にしていく一つの目標として、私はまず発表できるように頑張ります。この詩は小学校のとき読んだのと中学に入って今日読んだのとでは、少し気持ちが違っていた。何か頑張ろうと思ったし、頑張っていけそうな気持ちになりました。今日は書きたいことがいっぱいあってスラスラと自分の思いが書けました。この調子で生活ノートも頑張って書いていきたいです。「間違ったって、笑ったりバカにしたり怒ったり、そんなものおりゃせん。間違ったって誰かがよー、直してくれる。困ったときには先生が一生懸命教えるで」の言葉を励みに頑張りたいです。今度こそ自分の意見が遠慮せずに言えるようにしたいです。》

《今日の道徳の時間はすごくよかったと思いました。この１時間で自分がものすごく変わったからです。「そんな教室つくろうや」を読む前は、手も挙げられなくて、先生に当てられないと自分の意見が言えませんでした。小学校のときは友達の発表ばかりを聞いていて、なんか人の意見を盗み聞きしているようでなんか嫌でした。でもこの詩を読んでから、発表するというのが全然平気になりました。自分で手を挙げて意見が言えるようになりました。神様だって間違う世の中なのに私が間違ったってどうってことない。全然恥ずかしがることなんかない。人間だれだって失敗というものは必ずある。間違わない人なんて誰もいないと思います。間違ったら誰かが教えてくれるし、間違わないと勉強も楽しくないと思います。間違った答えをもう一度クラスのみんなで考えて、こうすれば答えが出るんだ。「うん、分かった」とみんなが納得していかなかったら、授業は全然楽しくないと思います。みんなが答えを知っているんだったら授業を受けることの意味はないと思います。

今日道徳の授業をしなかったら、私は自分で意見が言えない、手を挙げられない、すごく情けない人間のままだったと思います。だから今日の授業は一生私の心に残ると思います。１時間の授業でこんなに変われるなんて自分でもびっくりしています。だからこれから自分からサッと手を挙げて、自分の思っていることをドンドン発表していきたいです。道徳の授業はあまり好きではないけど、今日の授業は大好きでした。またこんな勉強ができたらうれしいです、そして自分をもっと磨いてもっと自分を好きになりたいです。》

《今日の道徳の時間の「こんな教室つくろうや」の詩は、とても好きでした。授業では習っていないけど、小学校生活の半分を教えてくれた先生が、とても好きで文集に載せたり、教室にはったりして、こんな教室を目標にしていました。

間違えた時に笑われた時、①「自分からユーモアなことを言ってわざと間違えた時」②「本当に間違えた時」というように二つあります。①の方はいいんですが、②の方はとても恥ずかしいものです。別に間違えるということは、悪いことではないので恥ずかしがらなくてもいいんですが、やっぱりいい気はしません。間違えた場合、みんなが笑わずに、「何か違う」と思った人は、みんなでいろんな意見を出し合って考えたらいいと思います。

間違ったら恥ずかしいと思っている人は、手を挙げようかと迷っているうちに授業が終わってしまうと思います。私もそんな一人でした。でもみんながそんなことを思っていたのでは、授業はつまらないものになっていくと思います。そんな時に「私が」という気持ちで手を挙げていくことによって、少しずつ自信がついていくと思います。「だれかがやってくれる」という気持ちではなくて、まず「自分が」という気持ちが大切だと思います。だから間違えたらどうしようという気持ちはいりません。そんな心配をしないようにするには、クラスの子と仲よくなって、親友をつくり、みんなのことが信頼できるようになったら、どんどん発表できると思います。これから発表は押し付けられて言うのではなくて、自分からこのことを言ってみんなに私の気持ちを

伝えていきたいという意志で、これから積極的に取り組んでいきたいです。》

《今日、道徳の時間に「そんな教室つくろうや」という文を読んで、全員で意見を発表し合った。私は小学校のとき思いきり元気よく手を挙げて答えを言ったことがありました。そのとき思い切り間違って、とてつもなく恥ずかしい気持ちでそのまま席につきました。それからはやっぱり間違うのが嫌で、それまでは手を挙げて何度も発表していたけど、今は手を挙げて発表することもほとんどなくなったし、発表するにしても人が何人か言った後で言うことが多くなりました。こんなことだから「あっ、〇〇さんと私の思うこと違うなあ」と思っても、『どうしよう。言おうか、言うまいか、言ってもし変だったら、また恥ずかしい目に合う。でも言わなければ、自分の言いたいことが言えないですっきりしないまま終わっていく。どうしよう、言おうか、言うまいか、言おうか、言うまいか』こんな考えが頭をぐるぐる廻って、あせってこんなことを考えて迷っている間に別の話に変わってしまったりすることがあって、「ああ、ああー」と思っていたことが、本当にほとんどでした。ずっと自分が自分の中の間違ってしまったら恥ずかしいという気持ちに勝てないでいたから、そんな気持ちに負けて言えないでいたんです。けれど今日「そんな教室つくろうや」という文についてみんなで意見を出して、それをよく一人一人聞いていると、段々と間違うことは恥ずかしいという思いがすっと引いていきました。そして「みんな同じだ」と思いました。みんな手をどんどん挙げていこうと思っている。私はそう思ったけれど、全員言い終わってそれを聞いて、もっと頑張って手を挙げていこうと思いました。でもまだ完全には間違ったらどうしようという気持ちが、正直言って少し抜けてないと思います。いつかそんな気持ちをなくせたらと思います。それで言いたいことがはっきりと言えるようになれたと思います。

そして、「そんな教室つくろうや」に出てくるような教室になれたらと思います。そのような教室をつくっていくのは、ほかでもない私たち１年Ｂ組の全員の人たちです。もしも間違えていたとしても、友、先生、みんなを信じていれば、やり方だって、ここはこうするって温かく教えてくれる。こんな学級になっていきたいと思います。

まだ中学生になって少しの日にちしかたっていません。まだよく知らない子や話していない子はいます。早く全員を知って、本当にそんなクラスができたらと思います。》

中学生活のスタートは本当に新鮮である。この思いをどのように本物にしていくかが、これからの同和教育の実践の中で問われていく。一人一人の不安や期待、そしてよりよく生きたいという願いをしっかりと担いでいきたいと思う。

中学校生活がスタートして２週間、４月２４日日曜日にＰＴＡ参観授業がある。クラスの半数ぐらいの保護者が授業を参観する。１年生に参観授業はこんなものかという感動があると同時に、生徒の一生懸命さにもやりがいを感じる。授業を同和教育担当の阿部先生にビデオ撮りをしてもらったのが、半数の生徒がそのことに緊張しながらも期待している。授業の前、阿部先生に大きな声で「よろしくお願いします」という声が委員長の号令でかけられる。私はすかさずみんなで歌を歌うかと声をかけた。授業の始め、「若者たち」の合唱が始まる。私はその歌声の中にこの子たちとならどんな峠も越えられると思った。歌の後すぐに授業が始まった。詩「峠」の授業である。３２名全員が「峠」の一節一節をかみしめるように力強く朗読し授業に入っていく。今まで３年生と取り組んできた詩「峠」の授業であるが、中学１年生は１年生なりに「峠」に寄せる思いを語っていく。小学校でのいろんな思いを引きずりながらも、不安がいっぱいの中学校で頑張ろうとする思いを語っていく姿が健気である。その中で小学校でなされた部落問題学習が語られた場面には驚いた。そのことを一番に出したＹ子は翌日の生活ノートに次のように記している。

《小学校のとき何時間も授業をつぶしてやった話し合い全体学習。今日参観日でみんなの言っていることを聞いてみたら、やっぱり南小学校は負けていない。６年生全員でやった奉仕活動、続いて５年生、４年生、３年生‥‥、学校全体で奉仕活動をやった。１年～６年の縦割り班でやったオリエンテーリング。南小学校の看板を背負った私たち、もう私たちの前には壁はない。１年～５年に６年生として認めてもらいたかった。みんなで心を込めてつくった「渋染一揆」の良平。それは解放文化展にも出した。そしてその連判状には自分の名前を書いた。町民センターの発表はみんなの意見をぶつけた。あの文章は全部みんなで考えた。Ｔ先生が「みんなの言いたいことをわしが勝手に決めれるか」と言ってくれた。自分の出番を待っていたら、「全員で言うたら気持ち伝わりますか」と言われた。それもそうやなと思った。出番が近づいて自分たちが言ったとき、「お前ら幸せな暮らししとって何が差別なくそうな」という視線、言いにくかったけど、「差別なくならんわと思っているよりましじゃ」という思いで訴えた。

今まで嫌われていた子が、「私のことどう思っているん、日記に書いてきて」と言った。みんな今のままではいかんと思って性格をなおそうとしている。それなのに次の日に書いてきてない子が何人もいた。私もその一人だった。そこで全体学習になった。今までおとなしかった子が一番に言った。私は何も言えなかった。この子はみんなを信頼して書いてきてよと言ったのに、私は自分で自分をなんて情けない人間なんだと思った。

こういうときは自分の悪いところをさらけ出すしかない。私だってこの子が嫌いだった。先生もそれを知っていたからこの子の良いところばかり書いてきてもそんなん嘘じゃってわかるし、だから書いてこなかった。でも私はこれから頑張ったらすむけど、この子の傷は治らない。この子は私やを成長させる道具ではない。

教室を抜けて家に帰ろうとした子もいた。そのときみんなで泣きながら追いかけた。連れて帰ってきてみんなで意見をぶつけ合った。教室のすみで意見を言わずに泣いている子もいた。私は何が悲しいんな、黙っていたらわからんわと言った。そのとき７時まで話し合った。

体操発表会のとき、前廻りのできない子と７時まで練習してできるようになったこともあった。そんなことが半年ぐらいの間に５０回ぐらいあった。でも半年ぐらいたったら、先生は話し合いの時間を３０分ぐらいにした。「なんで」って言ったら、「何時間かけてもみんなが言うのを待っているんではレベルが低い。短い時間でみんなが言わなあかん、みんなにはもう話し合いで解決する力がある」と言ってくれた。

泣いている子がいてみんなでそのことについて話し合って解決して、「みんなすごうなったなあ」と言ってくれたこともあったし、「みんなは本当に力があるんか、力があるんだったらみんながもっと頑張れ」って言われたこともある。Ｔ先生は差別に関してはちょっとのことでも許さない。こんないろんなことがつまった学級通信「しおん」は１年間で３００号を越えた。また東小学校の子にも、西小学校の子にも見てほしい。

学習会に行っていない子とも、「僕ら学習会、遊びに行っていると思っていた。ごめんよ。」と話し合ったこともある。１年間で話し合いが何回もあった。Ｔ先生にものすごく怒られたこともあった。私は１年間ずっとＴ先生に腹が立って嫌いだったけど、私がここまで変われたのはＴ先生のおかげだ。

今、自分のしてきた差別に気がついた。中学校は人数が多いけど絶対一つになってみせる。》

この生徒たちの思いをしっかりと育てていく。それが小学校・中学校の連携なんだと思いながら生徒たちの発言や生活ノートの一節一節を受け止めている。生徒たちが主体的に語り出すと、

５０分間はアッという間に過ぎていく。参観授業の終わり、生徒たちは再び「若者たち」を歌った。３２名のさわやかな歌声で「峠」の授業は終わった。授業の後、ビデオ撮りをしてくれた阿部先生への「ありがとうございました」という声の大きさにも感動する。この授業は、生徒たちと共につくった授業としていつまでも心に残ると思う。翌日の生活ノートがそのことを示している。

《今日は参観日で「峠」の詩についていろいろ感じたことや、思ったことをみんなで語っていきました。やっぱり保護者の人たちがたくさんきているので緊張してドキドキしてしまって、「うわー、どうしよう発表できるかな」と心配でした。その上、ビデオカメラで撮影が始まったので、一段とドキドキしてきて、カメラの方が気になってしまいました。でも気にしないでこの道徳の時間を頑張ろうと思って、「峠」のことを考えると、自然に何も気にならなくなっていつも通りできました。そして、自分が思ったことを言えました。すごく本当にすっきりしてよかったです。みんなも全員自分の思っていること、感じていることを発表できて、いい気持ちになったと思います。また、全員の思いが１Ｂで発表されて最高の参観授業になったなあと思います。みんなの意見を聞いて思ったことはたくさんあります。小学校ではいろいろ思い出があって、「よかった」と思っている子がたくさんいて、同じことを考えている子がたくさんいるなあと思ったり、「よかった」と思うけど、「もどれないし、これからどんどん頑張っていきたい」ということで、これもよく似た考えで、ほとんどみんな同じで、今頑張ろうとしているみんなと共に、これからも頑張っていきたいなあと思いました。また昨日書いた生活ノートと同じ文になるけど、「一日一日を大切に頑張っていきたい」です。それでいい風景を自分の中におさめていきたいと思います。それにこれからいろんな峠を通り越して立派な人間になりたいです。こんなことをたくさん「峠」の詩では感じることができました。本当にいい詩で、あゆみにこの詩が心に残ると書いた子の通りで、本当に心に残る詩に私の中でもなりました。なにかわからないけど、「頑張ろう」という気持ちがわいてきます。いろいろな「峠」に当たり、くじけそうになったときに、この「峠」の詩を思い出して「頑張ろう」という気持ちになって一生懸命頑張っていけたらと思います。それに、そんなときにはまず仲間を信じて、そして自分を信じて頑張っていけたらと思います。》

《参観日に「峠」という詩を勉強して私は今すごく大切な時期を生きているんだと思いました。まだ始まって２週間という中学生活だけど、小学校の方がよかったなあという気持ちがあります。今中学校と小学校の間に立って両方が見えてきて、やっぱり小学校の方がいいと何度も思ってしまいます。でも今日の参観授業で、私はやっと自分は中学生なんだという自覚がもてたような気がします。小学校と中学校の両方が見える峠に立って、これから始まる中学生活の楽しいことや苦しいことが少しずつ見えてきて不安もあるけど、私はどんなに苦しくともどんなにつらくとも、「あきらめずに頑張る」という言葉を忘れないようにしたいです。こんな苦しい道を先輩たちも通ってきたんだから、乗り越えることができたんだから私もできるはずです。私は小学校１年生になったときもたくさんの不安や楽しみがあったと思います。その中で私は勉強をちゃんとできるかなあという心配が一番でした。中学生になった今でもそうです。だから発表したときはそのことを言いました。みんなも勉強のことなど、そして友達のことなど不安がたくさんあったと言っていました。私は「峠」の詩をみんなと学んでたくさんのことを教わりました。私にいっぱい勇気をくれた「峠」の詩ってすごいと思いました。それにこの詩を読んでいると「頑張れ」と言われているようで励まされます。これからたくさんの峠を小学校の時みたいにコツコツと少しずつ努力しながら越えていきたいと思います。そして少しずつすばらしくなっていく自分に誇りを

もって、自分は自分でよかったと心の底から言えるような人間になりたいです。》
《今日の参観授業は「峠」の詩について勉強した。みんな同じような思いを語ってくれた。私も中学生になってしんどいとか苦しいなあと思うときがある。そんなときふと小学校生活を思い出して文集を読んだりすることがある。小学校３年間も教えてくれた先生、優しかった先生、厳しかった先生、友達、学校、運動場、教室、いろんなことが頭に浮かんできて、小学校の頃が良かったなあと思う。中学生になったら、部活動も疲れるし、勉強も増えたし、休み時間も少ししかない。いろんな面で小学校と違う。苦しければ苦しいほど小学校がなつかしく思えてくる。でもいつまでも「小学校がよかった、小学校の方が‥‥」って言ってばかりじゃ何も始まらない。だからまず何かを励みに頑張っていこうと思う。今日の参観授業はいろんなことが言いたかったけど、緊張して言いたいことの半分も言えなかった。今度の参観授業やこんな勉強をするときは、もっと自信を持ってもっと長く自分の本当の気持ちがスラスラ言えるようにしていきたい。そのためにも国語や、数学、社会、理科‥‥‥のときでも答えが分かっていたりしたらきちんと意見が言えるようにしていきたい。Ｙ子さんが言っていたように、今まで差別はしてはいけない、差別をなくそう、なんて言っている自分の心の中にある差別、そんな差別を自分の心から、教室からこの学校からこの世からなくしていこう。なくせたらいいなあと思うだけでなく実行していきたい。そして「そんな教室つくろうや」の詩のような教室を作っていきたい。誰かが間違ったら自分のことのように注意し合えるような信じ合える仲間をこの１年間でつくっていけたらなあと思う。今日の授業はして良かったと思う。これから峠をいくつも越えていって、その度にあの頃は良かったと何度も思い返すだろうけど、そんなことばかり考えていたってもうもどることができないから、苦しいと思ったときには「峠」の詩を読んで、それを励みに頑張っていこうと思う。》
《私は「峠」という詩を学習しました。私は「峠」という詩の一番最初の文を見て考えが変わりました。それはもう過去には絶対に帰れないということがわかったからです。小学校はとても楽しかった。そのことを思い出してなつかしいなあと思うのはいいけど、「あの頃は良かった」と思っても、あの頃にはもどれないとわかっているので、今をしっかり見つめて未来に向けて頑張っていこうと思いました。今はまだ小学校の頃を思ってしまうけど、少しずつでもいいから今の全力で頑張れるようにしていきます。

この「峠」という詩は、ああそうだと思わされるところがたくさんありました。今は分からない言葉や意味がたくさんあるけど、大きくなって読んでみると絶対もっとああそうだと思うと思います。私は「峠」という詩のことを忘れずに頑張っていこうと思います。そして、何度も何度も峠に出会うと思うけど、クラスの子と頑張っていこうと思います。でも私にとって峠とは何かというのがあまりわかっていないので、その峠を見つけてクラスの子と力を合わせて頑張っていきたいと思います。

悲しみを越えた分だけ、新しい世界が開けていくと思います。悲しみの前で止まっていたのでは何も始まらないと思います。いつも少しずつでもいいから歩き続けてゴールを目指していきます。私は私のゴールとは何かと考えながら頑張っていきたいです。》
《私は参観授業で「峠」の授業をして、ほとんどの子が小学校の方がいいと思っていることがわかりました。私もです。でもみんな決して過去にはもどれないということはわかっています。みんな中学校でも頑張っていくと言っています。私も同じです。

中学校には何より部活動があります。それぞれの部によって終わる時間は違うけど、やっぱり小学校のときよりは遅くなってしまいます。（小学校で学校にいた最高時間は５時）やっぱり大

変です。それからかえって宿題、私は７時から９時まで塾に行っています。月曜日と木曜日です。その日は宿題を１０時からしなければならない。考えただけで大変です。

でもみんなが考えているように思い出ばかりに浸っていては成長できません。私はいつも前進していこうと思います。もし嫌なことがあって私が「前の方がよかったなあ」と思い前進をやめて立ち止まりそうになったら、この「峠」の詩を思い出して頑張ることができて、嫌なことを乗り越えてまた前進できたらと思います。

こういう気持ちをみんなに聞いてもらったり、みんなの思いを聞かせてもらったけど、まだほんの少し私の心の中にも、みんなの心の中にも言いたいことが残っていたかもしれません。それを言えたり、聞いたりするには、先生やみんなが言っていた信頼が必要です。私が小学校のときはみんなのことが信頼できました。「２２人のみんなと先生がいるから大丈夫」と思い覚悟を決めたら発表できました。だからＢ組の子のことも少しずつ少しずつ信頼できると思います。

Ｙ子さんが言ったように、１年Ｂ組の子と出会えたのも何かの縁です。みんなと仲よくなりたいです。まだ話をしていない子もいるけど、みんなと仲よくなれたら、そして１年の子全員と仲よくなれたら、次は学校全体の人というふうに少しずつ話ができるようになって、みんなが私のことを信頼してくれて、私もみんなのことを信頼できたら絶対うれしいと思います。

この１年間で道徳や国語や、他の時間も全部頑張って、少しずつ全体の人のことを信頼して、そして私のことも信頼してもらえるように頑張っていきたいです。そして、勉強、スポーツ、何事にでも努力し、それを認められるようになりたいです。そしてお母さん、お父さん、おばあちゃん、妹、弟に、「この子が私の子どもでよかった」「この子が私の孫でよかった」「この子が私の姉でよかった」と思ってもらえ、「私は私でよかった」と思えるようになりたいです。》

その参観授業の２日後から家庭訪問が始まる。中学校へ入学して初めての家庭訪問、やがて始まる学習会や部落問題に寄せる本音を語っていく全体学習、その中でまだまだ社会的立場を自覚していない対象地区生徒に対して、自らの誇りと自信を持って学習会に参加させたいという願いを込めて、家庭訪問での限られた時間であるが、１年生のすべての学級担任が、同和教育に寄せる思いや願いを語っていった。１年Ｂ組の学習会に参加している９名の家庭訪問もまさしくそうであった。

家庭訪問第１日目、Ｔ夫の家庭訪問である。私はＴ夫の母親に私が教職につくまでの営みと板野中学校での４年間を語っていった。母親は部落差別から逃げずに生きてきた自らの生きざまを私に語ってくれた。その話を聞いていたＴ夫は学習会や学級の部落問題学習での頑張りを決意しているようであった。家庭訪問翌日に生活ノートにはノート２頁にわたる思いが記されている。《今日、家庭訪問で先生が部落問題について話をしてくれた。僕が部落出身ということは小学校６年生のときに知ったけど、初めはあまりよくわからなかった。その頃先生が、「部落の人たちは差別されてきた人たちなんだ」と言われたとき不思議だった。なんで僕が部落の人なんだろうと思った。夜寝るとき、もしみんなに僕が部落の人ってわかったらどう思われるんだろうか、陰でどんなことを言われるんだろうか、遊んでくれるんだろうか、いろんなことを考えた。だけどよく考えてみると部落や同和地区というものはどこにもない勝手に決められたものだと思った。そう考えたら、きっとみんな「あいつ部落のやつなんぞ」ということなんて全然言わないと思った。

僕が今まで部落問題を学習してきて一番腹が立つのは、部落に生まれなくてよかったという気持ちで多くの人が部落を見ているところです。どうして部落とか同和地区といって差別していく

んだろうと思います。僕だって幸福に生きていきたいと思っています。それなのに部落の人との結婚は認めないということが今もあります。人間はそれぞれにすばらしいものを持って一生懸命生きていると思います。その一生懸命生きていることが誇りなのに、その人の生まれた場所で差別していくというのは絶対におかしいと思います。多くの人の心の中に自分は部落で生まれなくてよかったという思いがあります。その気持ちが差別を残していき、僕たち部落の人たちを苦しめてきたんだと思います。

僕の好きな言葉に「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」というのがあります。僕はこの板野中学校で差別の問題を始めとするいろいろなことを学んで部落差別をなくしていく一人になりたいです。》

この文章を読んだとき、やっぱり部落は重いということを今さらながらに思ったし、もっともっと私自身が頑張らなければという思いになる。しかし、それ以後の授業、学習会について話し合った授業でＴ夫は、部落に生まれた思いや部落差別をなくしたいという願いを学習会に通う仲間と共に語っていく。Ｔ夫とＴ夫の母親、その両方にとって大きな意味を持った家庭訪問であった。

家庭訪問２日目は、Ｓ子とＫ子の家庭訪問があった。Ｓ子は文理中学校を受験し合格したが、板野中学校へ入学してきた生徒である。母親は私に言う。

「先生は、板野中学校はすばらしい学校だと入学式の日に語ってくれたけど、それは同和教育だけのことでしょう。」

私はＳ子の母親に同和教育の本質や私の生い立ちを語っていった。

「同和教育は教育の中核なんです。人間としてどう生きていくかということがしっかりしていかなければ、心豊かにたくましく生きていくことはできない。同和教育がしっかりしている学校というのは、生徒一人一人が人間としてどう生きていかなければならないか、何のために学校にきているのかという目的意識を持って学んでいる。それは人生の様々な困難を見事に克服し、生き抜いていく力となっていく。私自身、世間の人が評価してくれる高校や大学に行けば、私の親も喜んでくれるだろうし、それで自分も幸福になれると思ってきた。事実そんな思いで高校や大学を考えた。しかし、人間としてどう生きるかという部分がしっかりしていないと人間はすぐに挫折してしまう。私は世間体に振り回される人間ではなく、自分をしっかりと持って生きていく人間をつくっていきたいと思っている。」

これはそのとき語ったすべてではないが、その家庭訪問でＳ子もＳ子の母親も、同和教育に対する思いは大きく変わったと思う。学習会の開講式に母親も参加し語ってくれた。

「私は全面的に先生方を信頼しています。Ｓ子を自分の誇りと自信を持って堂々と生きていける子にしてやってください。」

Ｓ子はそれ以後、確実に成長している。Ｓ子の生活ノートの一部である。

《私は５年生のとき自分が部落に生まれたことを知りました。すごく嫌でした。つらかった。もう学習会なんて行きたくないって思いました。それからしばらくは学習会に行かず塾に専念していました。担任の先生によく言われました。「学習会行けよ」って。それでもなかなか行く気になれなかったのですが、一応行ってみました。意外でした。びっくりしました。私だけでした。部落から逃げていたのは・・・・・・。こんなにすごく勇気のある仲間がいるんだと驚きました。それからは学習会へ行くのが楽しみになったわけですが、まったく自分が情けないように思いました。それまで私は差別されるのが恐くて逃げてばかりいました。何もかもごまかしていました。でも

学習会に行ってわかりました。差別から逃げるのではなく立ち向かうこと、差別は間違いだといい説得できるようになること。差別をなくせるようにしっかりと勉強すること。学習会って大切だなあと思いました。先生方や先輩たちに期待された私たちは「差別は間違いだ」と訴えて、差別に立ち向かっていけるように精一杯頑張ります。差別のない未来をめざして。》

Ｋ子の家庭訪問は、常に重たいものがあった。Ｋ子の母親は学習会について批判的であった。その思いが、Ｋ子に部落問題を遠いところの問題としか捉えさせていない。私は私自身のことを語りながらＫ子にその本質を伝えたつもりであったが、翌日の生活ノートに現実の厳しさを感じる。Ｋ子は部落問題を自分の問題と捉えていなかった。３０分余り語った私の思いは遠くの出来事でしかなかった。その生活ノートは次のようなものであった。

《今日家庭訪問で先生が、先生自身のことを話してくれた。そのとき私は先生が部落出身であることを聞いてびっくりした。私は本当に先生は部落出身なのか疑ってしまいます。私はどうかは知らないけど、６年生の時に身分制度について先生からよく教えられていました。そしてその差別が今も残っていることを本当におかしいことだと思っています。でも部落の人は本当につらいだろうなあと思います。》

この生活ノートは本当につらいものがある。今までこのＫ子のような生徒との取り組みがよみがえってくる。私は学習会の意義について小学校の５年生の段階で学習会の仲間と社会的立場を自覚させたいという願いを持ち続けている。しかし、学習会が実施されているにもかかわらずそこまでの取り組みになっていない現実がある。そのことがＫ子たちをよりいっそう苦しめていく現実をもっともっと訴えていきたいと思う。

もう一つ、Ｋ子にかかわって悲しい生活ノートがある。それは母親の差別意識について訴えてきた文章である。

《私は小学校２年生ぐらいの時、お母さんから「あの子と遊んだらいかんでよ」と言われて私は「うん」と言ったけど、その子とは保育所からの友達だから、学校から帰ったときたまに遊んでいました。でも６年生の時、Ｋ先生から教えられてそれが差別ということに気づきました。私はこれからお母さんのような人を変えていきたいと思います。》

この生活ノートは、部落問題学習に寄せて記されたものである。このときＫ子は、自分の立場をまったく知らなかった。私はＫ子が自分の立場を自覚していないがゆえにより苦しいものを感じたし、差別構造にやりきれないものを感じていく。Ｋ子の立ち上がりを通してこの母親を変えていくそんな取り組みにしていきたいと思う。

そんなＫ子はＳ子と一緒に学習会の開講式に参加する。その開講式の３年生の発言から、Ｋ子は自分が部落出身であることを知った。開講式が終わった後、Ｓ子と私と３人で話をしたが、すでにＫ子の目には涙がにじんでいた。しかし、学習会の中に囲まれた中で目覚めた意義は大きかった。その開講式はまさしくＫ子に社会的立場をしっかりと自覚させていくものとなった。その思いをＫ子は生活ノートに次のように綴っている。

《私は小学校３年までは学習会に参加していました。でも４年生ぐらいから参加しなくなっていきました。そのときは学習会の大切さなんてまったく知りませんでした。今日、学習会場で３年生の人たちが話してくれたことで、私は初めて自分が部落出身であることに気づきました。瞳には涙がたまってきたけど、３年生の人たちの言葉に私も頑張れるんだと思いがわき起こってきます。私はＳ子さんたちと一緒に学習会に参加しています。そして今日私に本当のことをわからせてくれた３年生のようになりたいです。》

家庭訪問３日目はＳ夫の家庭訪問があった。母親とおばあちゃんが私を迎えてくれた。小学校の頃から陸上の大会で活躍してきたＳ夫の写真や賞状が部屋いっぱいに飾られていた。部落の親の子どもに寄せる思いが痛いほど伝わってくる。私自身がそうであったからだ。私は柔道を中学高校と続けてきたがその賞状の一つ一つを祖父が大切に額に入れて飾っていたことが思い出されてくる。私はこの親たちの思いに応えていく教育をやっていくんだという思いが熱いものとなってわきおこってくる。私の言葉に目をキラキラ輝かせて応えていくＳ夫の姿が頼もしかった。Ｓ夫はすべての面で１年Ｂ組をリードしている。Ｓ夫が学習会について綴ってきた生活ノートである。

《僕は小学校１年生のときから学習会に通っていた。そのときは学習会とはただ勉強して自分の知識を高くしていく場所だと思っていた。段々と学年が上がっていき、部落問題という新しい学習に取り組んでいくようになった。ただそのときはこんな勉強をして学力が上がるのかという気持ちが１００％心を支配していた。本当に部落というものを知ったのは小学校５年生のときだった。その部落問題に気付いてたとき、誰がどこで部落をつくったんなあと心の中は怒りでいっぱいだった。

自分が部落出身と気づくまでは、なんで僕らだけ学習会にいかなあかんのかと思って、友だちに「なんで僕らだけ学習会にいっきょん」と聞いたことがある。あるとき先生に言った。「学習会って部落問題をなくすところだろう」って、そのときやっぱりそうなんだと気付いた。

「学習会に行っているのは僕らが部落の人間だからか。もしそうだとしたら、学習会ってだれがつくったんなと思う。」そんな気持ちがある。だから中学生になったら学習会はいかんぞと前から思っていた。でも学習会に行かなかったら誰が差別をなくすんなと自分の心を殴った。こんな弱気ではいけない部落差別と闘っていくのは僕たちなんだと思い、やっぱり一人より10人の方が強い。１０人より１００人の方が強い。そう思って仲間をいっぱいつくって部落差別をたおしていきたいと思っている。

僕はＫ会場で１年生は一人だけど、部落問題・差別問題について、どの授業より必死に心の底から言っていける自分自身にしていきたい。そして、１人より１０人、１０人より１００人という考えで部落差別をなくしていきたい。》

また母親の生き方に寄せて次のような生活ノートも綴っている。

《今日、お母さんに学習会のことについて聞きました。するとお母さんの時代も学習会という名前だったんだけど、大寺の会場で勉強していたそうです。やっぱりその頃も部落問題の学習はしていたそうです。お母さんは部落問題の勉強になると必死にやっていたそうです。お母さんは９人兄弟の末っ子です。けど小さい頃から幸福に育っていて、大人になってお父さんと結婚しました。お父さんは同和地区の人ではなかったけど、今は家族そろって幸福です。》

家庭訪問４日目はＫ夫とＭ子の家庭訪問があった。Ｋ夫は小学校からのリーダーであり、中学校でも部落問題学習に頑張っていくという意欲に溢れた生徒である。Ｋ夫の母親に同和教育を語ったとき、母親の不安と怖れが私に突き刺さってきた。

「先生、中学校ではもうごまかしがきかないんですね。」

目に涙をためて訴えてくる母親に私は精一杯の言葉を返していった。

「お母さん、この問題は恥ずかしがって逃げてすむ問題ではないと思う。子どもたちに確かな生き方をつかませていきたい。そのためにも嫌なことが嫌と言える。つらいことがつらいと言える。うれしいことが心の底からうれしいと言い合えるクラスや学年にしていきたい。そして僕は私は

このために学校へきて、みんなと本当の仲間になって頑張っていくんだという意識を持たせて意欲的にすべての教育活動に取り組んでいく生徒にしていきたいんです。」

この言葉にK夫もK夫の母親もしっかりとうなずいた。翌日、K夫が綴ってきた生活ノートは私たち教師集団に「もっともっと頑張ってください」と訴えているようだった。

《今日家庭訪問だった。いったい先生はどんな話をしてくれるのかと不安な気持ちで先生を待っていた。勉強のことにしても僕は僕なりに頑張っているけど、まだまだ頑張らなければという気持ちがある。いろんなことを思いながら先生を待っていた。でも先生は勉強のことも話してくれたけど、それとは別にこんなことを話してくれた。それは差別（部落問題）についての話だった。

僕の父さんは同和地区出身だ。でもそれがどうした。なにか悪いことでもしたというのか。お父さんは好きでそうなったんじゃない。でもよそからおかしく思われている。小学校のとき、僕はそのことについて知った。「僕の父さんは同和地区の出身なのか、よそから変に思われとんか」始めはそう思い一人で悩んでいた。でも学習会でいろんな話し合いをしたことによって、僕は自信がついた。そんなことを気にしてどうするか。お父さんはものすごく一生懸命働いているし、僕にいろいろな心をぶつけてくれるすばらしいお父さんだ。それなのに同和地区といって差別する方が人間でない。父さんがあんなに頑張っているのに僕が同和地区に生まれたことを恥ずかしがってこそこそしてどうするんな。みんな同じ心を持つ人間なんだと思うようになった。

でもお父さんとは何度か話をしたけど、お母さんとはそんな話をしたことがなかった。だからお母さんは今日まで僕のことがとても心配だったそうだ。先生が帰ったあと、お母さんが「K夫、同和地区のこと、知っていたんか」と僕に聞いた。「僕は知っていた」と言った。それから御飯を食べてお風呂に入って、「もう寝るよ」と言った時、お母さんが「K夫、ちょっとお母さんと話をしよう」と言った。僕は「うん」と言った。お母さんは「K夫は同和地区についてどう思っているの」と言った。僕は思うこと全部をお母さんに話した。

僕は同和地区出身のお父さんに腹や一切立てていない、うらんだりなんか絶対しない。お父さんは頑張っている。差別する人にや負けんと頑張っている。僕は同和地区の人間と言われてもさびしくなんかない。僕のお父さんが同和地区出身と知っていても心と心で分かり合える友だちが今いる。この学校でもわかってくれる人間は絶対にいる。僕はお父さんやお母さんの子どもになれてとてもうれしい。でも同和地区の人間といって差別している人はどんな気持ちで僕らを見ているんだろうか。

少し言うのはつらいことなんだけど、表面的に仲の良かった子が近所にいた。でもあることがあってその子とほとんど顔を合わさなくなった。それはその子のお母さんが僕の父さんの里を知った時からだった。僕は本当にものすごくつらかった。これが差別なのかと思った。でも小学校での心の学習で頑張っていく中でH君という仲間が僕の心をわかってくれた。僕が同和地区の人間だと言っても、それがどうしたんなって向かってきてくれる仲間がいた。僕はたまらなくうれしかった。頑張って心に思っていることを全部出してよかったと思った。僕にはそんな仲間がそばについていてくれる。もっとそんな仲間をつくりたいと思う。

それともう一つこんな話をしてくれた。お父さんとお母さんが交際していた時、お母さんのおじいちゃんとおばあちゃんにすごく反対されて、お母さんはお父さんと会えないようにされたそうだ。それでもお父さんとお母さんは会い続けて、お母さんはおじいちゃんとおばあちゃんに勘当されてしまったそうだ。僕はその話を聞いた時「えっ」と思った。あの優しいおじいちゃんとおばあちゃんが、このことになると鬼のようになるのかと思って信じられなかった。

お父さんはすごくつらかっただろうなあと思う。でもお父さんとお母さんは結婚したんだ。僕はお母さんが恥ずかしそうに言っていたのを見て、何も恥ずかしくない。ものすごくすばらしいことでないかと思った。それから僕が生まれておじいちゃんやおばあちゃんがお父さんを認めるようになった。でも絶対そんなことがあるなんておかしい。今でもお母さんのおじいちゃんは農作業の手伝いにきてくれる人たちに、K夫君はどこの学校に行っているのと聞かれると、「藍住」という時がある。僕はそういう嘘を聞いているとき、なぜ嘘をつかないかんのかと思ってくやしい。とてもつらい。おじいちゃんはいったいどんな気持ちでその言葉を言っているのだろう。僕にはまだそのことを言う力はない。僕だって差別者なんだから……。

これから僕もお父さんが経験したような壁にぶつかるだろう。でも僕は負けへんぞ。絶対に負けへんぞ。負けんように頑張る。これから始まる中学校の学習会、自分の弱い心に負けんと、一生懸命頑張る。勉強だって必死で頑張る。そして自分に誇りと自信をもって生きていく。

それと僕は一度おじいちゃんとおばあちゃんに差別について話をすると心に決めた。きっとおじいちゃんだってわかってくれると思う。必死に話をしたらわかってくれると思う。僕は頑張る、自分について知ってもらう。

僕はそんなことを言っているうちに、こんなことを知ることができた。人間はかわいそうと言ったらそこで終わりだと思う。困っている人を見てかわいそうと言っているのは、その人を自分より下に見ている心があると思う。だから僕はかわいそうや絶対に言わない。困っている人がいたら同じ思いで頑張っていける人間になる。》

M子の家庭訪問も熱い思いでいっぱいになる。M子の母親は語ってくれる。

「私も就職したばかりの頃は、部落の仲間と共に差別をなくすために頑張ってきた。あのころの私は今も私の中で生きている。先生、私も頑張ります。」

そう語ってくれる母親の横で目を輝かせているM子の姿がたまらなくうれしかった。M子はまだ漠然としか部落問題が認識されていないのが現実であるが、このM子をたくましく鍛えあげていく授業を実践していきたいと思う。以下M子の生活ノートである。

《今日の家庭訪問で先生が話をしてくれたことで、私の中にあったモヤモヤしたものが吹っ切れたような感じがします。先生も私と同じように部落に生まれたことは前に話をしてくれたので知っていました。私は自分が部落に生まれた人間だということをはっきり知ったのは、小学校５年ぐらいでした。それまでは学習会には無理矢理行かされているのだと思っていました。他の子が楽しそうに遊んでいる時間に、私たちは学習会で勉強していました。すごく腹が立ちました。どうして私たちだけがという気持ちでいっぱいでした。でも５年生になって部落問題学習をして、私はやっと学習会へは差別をなくすために行っているのだと思うようになり、今では学習会に行くのは、そんなに嫌ではなくなってきました。そして部落差別をなくして、段々と学習会自体をなくしていけるようにしなければいけないと気づくようになりました。部落に生まれたというだけで結婚さえできない人がいるのは本当におかしいことなんだと全部の人が気付いていかなければいけない。私も自分の気持ちを出していけるようにしたい。》

またM子は学習会について話し合ったとき、学習会に寄せる思いを次のように綴ってくる。この思いは学習会に通う大半の生徒の思いと重なる。しっかりと受け止め、部落問題学習のあり方、学習会のあり方や方向をしっかりと考えていきたい。

《私は小学校３年生のときから学習会に行っていた。そのときは不思議な気持ちでいっぱいだった。どうして１年生や２年生のときは行ってなかったのに、急に行くようになるんだろう。なん

で同じクラスの子があまりきていないんだろう。今日は休むのかなあと思ったりした。本当にそのときは何も知らなかった。４年生、５年生とあがってくるうちに段々学習会がにくくなってきた。なんであの子は行かないのに、私だけが行かなければいけないんだ。本当に腹が立った。

５年生のとき、お母さんが私に言った。「お父さんは違うけど、お母さんは部落に生まれたからＭ子は学習会に行っているの」そのときの私には部落という意味がわからず、お母さんの言ったことはそんなに気にしていなかったけど、部落問題学習をしていくうちに部落の意味がわかるようになり、私はお母さんたちを苦しめてきた差別にすごく腹が立った。それから学習会には差別をなくすぞと思いほとんど休まず参加した。

でもこの頃少し私は自信がなくなってきている。友だちに「私、今日用事があるけん、部活早めに終わるけん」と言ったとき友だちは、「用事って何？」って聞いて、私はドキッとした。その用事とは学習会があることだった。その友だちは学習会に行っていなかった。私はこの頃友だちの前で学習会という言葉を出すのが、少し嫌になっている。学習会と言った瞬間、もしかしたら友だちに嫌な顔をされるのではないかと不安になる。前はそんなことなかったのにこの頃心配です。でもくじけず頑張ります。》

Ｍ子を苦しめているものは何か。その中でも頑張ろうとするＭ子の思い。このＭ子の思いをみんなで担いでいきたい。それが部落問題学習の大きなねらいの一つである。

家庭訪問最終日になったＹ夫とＩ子の家庭訪問は私に強烈なものを残していく。Ｙ夫は家庭訪問の日まで、自分が部落出身であることはまったく知らなかった。Ｙ夫は釣りを得意としていた。Ｙ夫と話をした部屋には大きな魚の魚拓がいくつか飾ってある。釣りの話をうれしそうにしてくれたＹ夫であったが、学習会の話、部落問題の話になった途端に無関心な態度になった。小学校６年の後半から学習会に参加するようになったというが、中学校ではもう学習会には行かないという。どうしてかというと、はっきりとした理由はない。母親も本人しだいですという。

私は私の学習会との出会いや学習会のあり方について語っていった。その話の中で、Ｙ夫は初めて自分が部落出身であることを知る。やがて目にいっぱいの涙、やがて大粒の涙がボタボタと落ちていく。この涙は本当につらいものがある。ここまでして起こす必要があったのかという思いにもなる。中学１年の今ですらこんな思いになっていくのに、このままにしておいてどうなるのかという思いが私の心を支配する。Ｙ夫の家庭訪問は、１時間近い時間を要した。帰り玄関先で私はＹ夫の心に刻みつけるように言った。

「そんな情けない涙が消えていくように学習会も、クラスの部落問題学習も頑張っていくぞ。」

そのときのＹ夫の「はい」という返事が今も心に響く。Ｙ夫を目覚めさせた人間として私はＹ夫と闘い続ける。その日に綴ったＹ夫の生活ノートである。

《今日僕は初めて自分が同和地区の人間であると知ってすごくはがいたらしくなった。なんで僕が同和地区の人間にならないかんのかと思った。そんなことを思ったら涙がいっぱい出てきた。でも先生と話をしていく中で、僕は今まで部落の人を差別していた自分が恥ずかしくなった。でも差別があることがくやしくてたまらない。

僕は今まで部落問題の勉強をしてきたとき口先でかわいそうと言ってきた。でも僕には絶対関係ないことだと思っていた。そんな自分が情けない。》

また、Ｙ夫は学級の部落問題学習で、かつて学習会に参加できなかった先輩の思いを話した時、次のような生活ノートも綴っている。

《今日先生が読んでくれた作文（かつて学習会に参加できなかった先輩の思い）と僕は６年の頃

いっしょだった。何が学習会だ。あんなもの誰がつくったんだと５年の頃思った。５年のとき、Ｕ先生に学習会に行っている子、図書室にきてと言われて僕は行った。そして先生は学習会にどんな気持ちで行っているのかをみんなに聞いた。僕は学習会に行っていないので発表する権利はないと思った。その日ある子が発表しながら泣いた。僕はなんで泣くのかと思った。僕は泣いている子の気持ちはそのときわからなかった。

６年生になって同じクラスの学習会に行っている子が、学習会にいっしょに行こうと言ってくれてすごくうれしかった。でも僕は行けなかった。でも僕は友だちがさそってくれたことによって学習会に参加するようになったけど、学習会の先生はどうして僕が学習会に参加しているのかは話してくれなかった。

中学１年になって家庭訪問のとき、森口先生が学習会について話をしてくれた。そして僕が部落の人間だと言ってくれた。そのとき僕は父さんや母さんはどうして言ってくれなかったんだろうと思った。とにかくそのときは口惜しく涙が出た。そのとき５年生のときある子が泣いた意味が初めてわかった。それまで気付いてなかった自分がくやしい。今思うと自分がそうだと言われるまで泣いた子の気持ちがわからなかったことが情けなくてたまらない。

僕は差別はなくせと言ってなくせるものでないと思う。一人が一人の気持ちをわかっていくことができて、初めて差別はなくすことができると思う。そして差別を自分のこととして考えることが大切だと思う。僕はこれからの学習で僕自身を変えていこうと思う。》

Ｙ子の家庭訪問は、小学校・中学校の同和教育の連携の大切さを再認識させられる。Ｙ子は自分に部落問題学習をしてくれた小学校の先生方を誇りにしていた。Ｙ子は私に同和教育の大切さとすばらしさを私に示してくれる。同和教育はＹ子の生命を守っていく営みだと思う。家庭訪問の日のＹ子の生活ノートである。

《私は小学校の２年３年４年のときは、あまり学習会に行きませんでした。でも５年６年になって差別のことを勉強して学習会にいかなおれんようになってきました。６年生になって学習会に行きたいという子がでてきました。でも先生が「同和地区の子でないからいけんのじゃ」と言いました。

私が放課後「みんなは私たちが学習会に行っていることを見てどう思う」って聞いたら、学習会に行きたいけど先生にダメと言われた子がきて、「僕らは学習会に行きたいけど、行かしてくれんのやけんほんなん関係ない」と言いました。先生が「お前たちが学習会に行けんのは、お前たちのじいちゃんやばあちゃんが学習会に行っている子のじいちゃんやばあちゃんを差別したんじゃ。おまえたちの優しいあのじいちゃんやばあちゃんが差別したんじゃ。学習会に行っている子のおじいちゃんやおばあちゃんは差別によってちゃんと学校へ行けなんだんじゃ」と言いました。みんなびっくりしていました。

私はその子たちのおじいちゃんやおばあちゃんが私のおじいちゃんやおばあちゃんを差別して、その差別によって私のおじいちゃんやおばあちゃんは学校へ行けていません。だから私はおじいちゃんやおばあちゃんの分まで勉強しなければと思います。私のおばあちゃんは小学校４年生の頃、奉公といって大阪に連れていかれて仕事をさせられたそうです。勉強もしたかったし、お母さんにも会いたかったから毎日泣いていたと言っていました。おばあちゃんは親戚のお兄ちゃんが高校に受かったらすごく喜びました。私にも「勉強しーよ」「勉強しーよ」とひつこいくらい言います。でも今私がこうしてみんなと同じ制服をきていられるのは、おばあちゃんのおかげです。》

生きること学ぶこと、その意味を問いながら確かな生き方をＹ子につかませたいと思う。

もう一人は、家庭の都合で家庭訪問期間中に家庭訪問を実施することができなかったＨ夫である。小学校のとき学校を休みがちであったＨ夫であるが、中学校で頑張ろうとする今の新鮮な気持ちを大切に育てていきたい。私が映画「学校」（山田洋次監督）について語った翌日次のような生活ノートを綴ってきた。

《今日の３時間目の授業で、僕は僕でよかった。僕に生まれてよかったということを聞いて、僕は自分の生命を大切にして、僕を育ててくれたお父さんやお母さんに、僕が生まれてきてよかったと言ってもらえるように頑張ります。》

この生活ノートはＨ夫の本心であったと思う。この思いをしっかりと担ぎながら確かな生き方をつかませやりたいと思う。また、クラスで学習会について話し合った後、Ｈ夫が学習会に寄せる思いを綴った生活ノートもＨ夫の思いに貫かれている。Ｈ夫の生きる力となる部落問題学習や学習会にしていきたいと思う。その文章は次のように綴られていた。

《僕も小学校の時、学習会に行っていたけど、５年の時は本当に学習会が嫌いだった。それはあまり友だちがいなかったから行ってもバカにされると思って学習会が嫌いだった。でも６年生になって学習会が好きになった。それは友だちもたくさんできて、僕みたいに学習会に行っている子がさそってくれたりしたから学習会が好きになった。それと今こんなに明るくなったのは、Ｉ先生やＫ先生が僕をこんなに明るくしてくれたからです。僕は４年生の時学校が嫌いだったから５日か６日しか学校に行かなかったけど、５年生になってＩ先生が担任になってから、僕は最初は行かなかったけど、毎日迎えにきてくれたりしてとてもうれしくて学校に行き始めると朝学校に行ったらみんなが「Ｈ君、おはよう」と言ってくれたりしたから、僕には友だちがいるんだと思った。

学習会に行き始めると、そこは楽しいところで先生も友だちもみんなが仲よくしてくれるのでとてもうれしかった。でも中学校に行ったら、南小学校や西小学校の子たちが来るから、また友だちができなくなると思っていたけど、中学校に入っていろいろな友だちが増えたから、その友だちとこれからも仲よくしていきたい。》

今年度の家庭訪問は、９名の対象地区の生徒以外にも様々な感動があった。本心を語り合うことが人間として温かいものが伝わり合うことを確信する。その温かい関係が私に勇気と意欲を与えてくれる。しかし、そんなすばらしい人たちの中に部落差別は存在し、本来同じ思いの中で生き頑張っているはずなのに生活の様々な部面で差別意識が顔を出し、それが生徒一人一人の中に重くのしかかっている。

明るく笑いの絶えない教室がとたんに重く沈んでいく。それは学習会や部落問題に話題が行ったときである。それは１年生のすべてのクラスに言えることである。わずか12年しか生きていない中学１年生の中に、差別意識が空気を吸うようには入り込んでいる。このことを今しっかりと洗うことなしに仲間づくりや学級・学年集団づくりはない。

４月の最後の道徳の授業で、話の話題を学習会に持っていった。今までにこやかに発言していた生徒たちの表情がとたんに曇っていく。なかなか手が挙がらない。生徒たちの息づかいが聞こえてくる。その中で対象地区生徒のＫ夫が口火をきった。

「みんなにこのことを言ったら、差別されるようになるかもしれないけど、僕は学習会で部落差別をなくすために頑張っていく。だからみんなも頑張ってほしい。」

部落宣言である。続いて同じ学習会に通うＳ夫が、Ｉ子が堂々と語った。そこには涙はまった

くない。その発言に打たれて発言の輪がクラス全体に広がっていく。その中でK夫が再び手を挙げた。
「僕は、この前給食をみんなで食べているときに、学習会があると放送があったとき、みんなが学習会って僕やもいかなあかんのかとか言っているのを聞いて、一瞬不安になってみんなを疑ったんです。僕はみんなを信じているので、学習会に行っている子も、行っていない子もみんなで一緒に差別をなくしてほしいと思うんです。」
この発言は、クラス全体に大きな衝撃を与えた。やがてチャイムがなる。「どうしてもこのことだけは言いたいという人がいたら……」という私の問いかけに二人の生徒が手を挙げた。
一人の生徒は涙で発言がとぎれとぎれになったが、その思いはクラス全体に広がった。この涙を流したのは地区外の生徒である。この授業の中でもう一人涙を流して語った生徒がいた。その生徒も地区外の生徒である。部落差別が存在することによってみんなが苦しい思いをしている。本当に頑張らねばと思う。
もう一人は家庭的に大変厳しい状況に置かれている生徒である。小学校の低学年の頃からある一人の子をみんなでいじめてきたことについて語り出した。その子と6年生で一緒のクラスになったとき、その子がとても優しくしてくれたことを語っていった。一人一人の生徒が自らの差別意識を洗いながら一つにつながっていくことの大切さを訴えているようだった。
その授業について綴られた翌日の生活ノートは、私に部落差別の厳しさを突きつけてくる。部落差別があることによって地区地区外を問わずすべての子どもたちが苦しんでいる。対象地区に隣接した地域に住む生徒の生活ノートである。
《「差別」私はその言葉を避けていた。逃げていた。そして、こんなことがあっても何も言わなかった。ある日、友だちのT子が言った。T子「A子（友だち）と、もう遊ばん。」私「どうして？」T子「お母さんが遊んだらいかんって言うた。」私「……。」T子「同和地区やけんやって。」私は熱くなった。A子は悪くないのに、同和地区やけんてなんで……。そんな地区にしたのは、A子の地区でなくてまわりの地区なのに……。けどT子に言えなかった。T子と喧嘩したくない。そんな恐さがよぎって言えなかった。弱虫だったんだ。でも今は言える。この勉強をしているときわかった。泣いている子もいた。それだけ苦しんでいるんだ。だから私もそんな人がいなくなるように頑張っていく。絶対に。学習会に参加しいる人と共に頑張る。》
本心を語っていく授業について、ある生徒は次のような生活ノートを書いてきた。
《学習会はどうして行っている子と行っていない子がいるのかと小学校の頃考えたことがあった。小学校で「学習会はどうしてできたのか」とみんなで話し合ったことがあった。差別が残されてきて差別に苦しんでいる人たちがつくったと教えてくれた。今も学習会があるということは、まだ差別が残っているということだ。今日も差別のことや学習会のことについて発表するとき、心が重たくなった。結局言えなかったけど、私の言いたかったことは、私は学習会に行っていないけど、学習会に行っているとか行ってないとか別に関係ないと思う。学習会では差別のことについて話し合ったり勉強したりしていると聞いたけど、学習会に行っている子だけ差別をなくそうと努力したって、差別はなくならないから、私はまず自分の心にある差別からなくせるように努力していこうと思う。
最近、国語や数学なんかの授業でも手を挙げる子は同じ子ばかりでほとんどの子が黙っている。私もその中の一人だ。自信をつけると言っても、努力しなかったら何も始まらないし、自分の意見を言わないということは人に任せたり、差別意識が自分の心の中にあるということだから私は

私の心をきれいにしていくためにも自分の意見をみんなにぶつけていきたい。》

また部落問題学習の中で揺れる思いを切実に訴えてくる生徒が段々と増えていく。その一人一人の訴えは、「先生、私は早くこの差別から解放されて本当の人間になりたい」と訴えているようだった。その一人一人の思いを学級・学年全体のものにしていきたいと思う。

私の心を揺さぶってきた生活ノートの一部である。

《私は部落差別のことを勉強して、やっぱり私は差別の話をすると、下を向いてしまうし、思っていることが言えず心が重くなります。私は私自身を苦しめているこの差別意識を少しでもなくしていけるようにみんなと頑張っていきたいです。

部落というのは遠い遠い昔のことで、決めた理由は支配者がすべての人を苦しめ自分の支配を守っていくためだったのに、そういう差別が残っている。絶対におかしいです。私がまずなくそうと心の底から思って、みんなが自分の問題と考えていうようになったら、すぐになくなるものだと思うけど、現実は今もだれかがどこかで差別をしています。私の心の中でも差別意識が顔を出してくるときがあります。

私はみんなの言っているように、差別をなくそうと１万回叫んでも、ノート１冊に「差別をなくします」と書き続けてもなくなりません。行動に出さなければ、人間は変わっていかないと思います。そして私たちにとって行動するとは、私たちの本当の思いをみんなに訴えていくこと、発言することだと思うようになってきました。私はみんなが一つになって心に思っていることを出し合うことが最も大切なことだと思います。

私は部落問題学習の時間が嫌でした。手が挙げられなく、うじうじした気持ちで終わることが嫌だったからです。でもこんな自分を変えていこうと思いました。私はやっと、部落問題学習の時間がどんなに大切であるかがわかりかけてきたように思います。》

《今日の道徳の時間、私はすごく心が重かった。息苦しく声もなかなか出ない状態だった。でも何も言わないということが差別していることにつながっていくと思った。私の中の差別意識がこんなに私を苦しめていることに私は今まで気づかなかった。小学校６年生の時、いろんな差別について勉強した。でも３学期の２月頃、先生が「みんなにはまだ越えなければならない壁がある」と言った。私は何のことかわからなかった。そのもう一つの壁というのは、学習会のことだった。先生はみんなに全力を出して本当の気持ちをぶつけてくれた。その先生がＴ先生だった。よく怒られた。けどみんなのために全力を尽くしてくれた。私はそのことがすごくうれしかった。みんなで涙を流しながら自分の気持ちを語り合ったこともあった。みんなと本当の仲間になれたのは、Ｔ先生やＵ先生みたいな先生が全力でぶつかってくれたからです。中学校でもそんな仲間をつくっていきたいです。》

《今日、道徳の授業があった。とても楽しみだった。あれも話して‥‥、これも話して‥‥と思っていた。そして道徳の時間がきて学習会のことに話題がいった。昼休みの放送のこと、学習会をどう思っているかということ、みんなの表情が重苦しい表情になってきた。私まで心が重くて「ドキドキ」してしまった。これが私の差別意識なのかとくやしくなった。先生が「差別する意識がみんなの心を変にしているんじゃ」と言ったとき、私は手を挙げろ、今頑張らなければいけないんだと自分に言い聞かせた。私は手を挙げて発表した。すると身体がスッーと楽になり今まで言えなかったことがすらすら思いついてきて、手を挙げたいと思うようになった。私は最初の１回目の発言がとても大切なんだと思った。

第１回目の全体学習、中学に入学したばかりの生徒たちに重くのしかかっている部落問題、そ

の第一は学習会のことである。毎日給食のときにある学習会の放送、毎月渡される学習会の通知、その一つ一つに対象地区の生徒も対象地区外の生徒も揺れている。そのことをしっかりと考え、自らの心の中にある差別意識を学年全体・クラス全体で洗い合いたいと思う。

学習会の開講式である保護者が言われた。

「日頃の生活で今、部落を認識するのは学習会に通知をもらったときです。」

部落差別は確かに見えにくくなっている。しかしまだまだ私たちの見えないところで、見えにくいところで血を吹いている現実がある。私は全体学習のスタートにこの学習会に寄せる生徒の本当の思いを語り合わせることを通して、一人一人の心の底にある部落という重たい差別意識を取り去っていきたいと思う。そして、生徒一人一人の部落差別を始めとする様々な差別をなくしていく主体者にしていきたいと考え本主題を設定した。

3　ねらい

差別の本質と自らの差別性に気づき、人間として美しく生きる姿とはどういう姿であるかを生徒一人一人の生活に関わってとらえさせ、常に真実を見つめ、部落問題解決に立ち向かおうとする意欲と実践力を身につけさせる。

4　指導計画

(1) 学習の流れ

・道徳　「そんな教室つくろうや」（私たちの道徳）……1時間
・道徳　「峠」（真壁仁）……1時間

(2) 本時の学習

・道徳　「学習会の友」（１９９３年度学習会実践記録より）‥1時間
・第1回全体学習　「学習会の友」（１９９３年度学習会実践記録より）‥2時間(1/2本時)

(3) 今後の流れ

・道徳　「意識の芽ばえ」（丸岡忠雄・詩集「部落」）……1時間
・第2回全体学習　「意識の芽ばえ」（丸岡忠雄・詩集「部落」）……2時間
・道徳　「自分以下を求める心」（佐藤文彦・わたしの願い）‥1時間
・第3回全体学習　「自分以下を求める心」（佐藤文彦・わたしの願い）‥2時間
・道徳　「ふるさと」（丸岡忠雄・詩集「部落」）……1時間
・第4回全体学習　「ふるさと」（丸岡忠雄・詩集「部落」）……2時間
・道徳　「人の値うち」（江口いと・荊を越えて）……1時間
・第5回全体学習　「人の値うち」（江口いと・荊を越えて）……2時間

5　本時の指導

(1) 目　　標

差別解消に向けてひたむきに生きようとするＴ子の思いを通して、部落問題を自分自身の生き方とのかかわりの中でとらさせると共に、人間として生きるとはどういうことであるかを考えさせ、差別解消に向けて生き抜こうとする態度を育てる。

(2) 展　　開

学　習　活　動	指導上の留意点
1　学習会をどのように意識してきたかを語り合う。	・学習会を初めて知ったとき、どのような意識が芽ばえてきたかを部落問題に寄せる自らの思いと重ねて考えさせる。
2　差別や学習会に対する苦い思いを持ち、学習会の通知をかくしてきたＴ子の苦しみについて考える。	・「学習会がきらいだった」と語り、その気持ちを「恥ずかしかった」と表現するＴ子の思いに寄り添い、何がＴ子を苦しめているのかを考えさせる。
3　堂々と胸張って学習会のことを語れるようにＴ子を変えたものについて考える。	・仲間の大切さをとらえさせると共に、仲間と本当の思いを語っていくことが自分を変え仲間を変えていくことを理解させる。 ・部落問題学習の中で変わってきた自分、変わろうとしている自分の思いと重ねて、一人一人の思いをＴ子の思いに重ね語り合わせたい。
4　Ｔ子の思いを自分に引き寄せると共に、自分は部落差別に向かってどう生きていくかを語り合う。	・「部落差別の風を吹き飛ばしたい」という先輩の思いに連帯させる。 ・仲間と共に差別解消に取り組んでいく意欲を持たせると共に、差別解消がすべての人間の幸福につながることを理解させる。

1994年度 板野中学校１年Ｂ組入学式

1994年度 板野町解放文化祭
人権劇「教科書無償のたたかい」

【資料】

「学習会の友」

私はずっと学習会がきらいだった。だから小学校のときからほとんど学習会に参加しなかった。べつに先生がイヤだからとか、勉強がきらいだからなんていう簡単な気持ちではなかった。ただ、恥ずかしかった。「自分は一生人に弱みをにぎられたまま暮らしていかなければならないのか」と思うと、差別される不安と学習会に対する怒りとが入り交じった苦い気持ちだった。

そんななか、私は中学生になった。ある日、家に学習会の先生が来た。私は本当にイヤだった。自分につきまとってくる学習会が・・・。でも、学習会について富加見先生がいろいろ教えてくれた。私はその場では「行く」と宣言したけど、まだ学習会のことについて心を開けなかった。だから中学校１年生のときはほとんどズル休み状態だった。

やがて中学２年での生活がスタートした。それから数日後、担任の先生が通知を机の上に置いた。私は「学習会の通知だ」と思った。私はすぐに隠すようになっていた。けれどそれから何週間かたって、Ｓ君と近くの席になった。それからだんだん仲良くなって、Ｓ君やＫさんやＭ君が「学習会にきーよ」と誘ってくれるようになった。私はそれがとてもうれしく、心が浮き上がるような思いだった。

つい最近、私には信じられないほどのことがあった。学習会のことについて心が開けたことだ。２年生での最後の全体学習で、私は自分が学習会に行っていることを190人の前で笑顔で言えたことだ。私は、私の心を開いてくれたＳ君、Ｋさん、Ｍ君に感謝しています。これからも学習会に参加していこうと思う。

部落差別の風を吹き飛ばしていきたい。私の一番の友は学習会の友だ。

１９９４年第１学年第１回全体学習・公開授業の記録（板野中学校１年Ｂ組）

主　　題　「差別解消の主体者として」　　１９９４年５月１９日（木）

資　　料　「学習会の友」　　授業者１年Ｂ組　森口　健司

Ｔ１：この前の遠足のとき歌った「翼をください」をみんなで歌って授業を始めたいと思います。

《学年全体で「翼をください」を合唱する》

Ｔ２：みんなが板野中学校に入学して１カ月あまりが過ぎました。この間それぞれのクラスで学習会についてみんなが思うことを語り合って、学習を深めてきたと思います。それぞれのクラスで学習してきた思いを今日学年が一つになって深めていきたい。そして、みんなでより確かな生き方をつかんでいく、そんな時間になったらと思います。今日は後ろに小学校の先生方もおいでてくれています。みんなと「そんな教室つくろうや」という資料や、「峠」の資料ではいろんな思いを堂々と語り合うことができたのに、学習会や部落問題のことになると、どうしても心が重くなる。みんなの中にある差別意識がみんなをとても重たくしていきます。そういうものを乗り越えて、みんなの本当の思いが語れて、みんなで本当に差別をなくしていく、そんな時間にしていきたいと思います。この問題に寄せる本当の思いは先生も生徒もなかなか語れません。それはやっぱり差別があるからです。差別はいけないということはいくらでも言える。でも、それぞれの人間にとって、教師にとって、生徒にとって、その生きざま、その生い立ち、部落との出会いや差別とのかかわりはなかなか口にすることができません。でも、本当

の思いを語っていくことなしに、部落差別をなくしていくという取り組みは確かなものにはなっていきません。今日の全体学習をみんなで部落差別解消に向けて取り組んでいくということがどんなことであるかを考えていく、そんな時間にしていきたいと思います。みんなの中には小学校のときに学習会を経験してきた人や、中学校に入学してきて初めて学習会というものがあるのかと意識するようになった人もいる。学習会の開講式が終わって、学習会が本格的に始まった。みんなが持っている学習会についての意識をみんなで語り合っていきたいと思います。

TK(男)僕は中学校に入ってから、自分が学習会に通っているということがなかなか言えなかったし、心の中に持っていることがなかなか言えないで苦しいときもあったんです。それでその弱い心に負けないように、今までかくしていたことや自分を差別していることとか、心の中に思っていることを吐き出してきたけど、今もまだ僕の心の中にはかくしていることがいっぱいある。だけど、それがだいぶ自信を持ってみんなの前で言えるようになってきたんです。まだ自信がないところもあるけど、自分をもっと強くしていくために、自分の中にある差別意識に負けないように、みんなの前で発表してもっともっと自信をつけて、差別に負けない生き方をしていきたいと思います。

ST(男)僕は小学校のとき、こんな問題は別に何とも考えなくて、体育とかの授業では張り切って堂々とやってきたけど、こんな授業のときは下を向いて眠たくなっていたけど、中学校に入ってからこの問題に対してすごく怒りというものが自分にあふれてきて、今は体育も好きだけど、この問題を考えていくのが一番好きになっています。

T3 ：今語ってくれたＴＫ君やＳＴ君の思い。その思いを受けとめてどんな思いがみんなの中に広がりましたか。ほんまの思いにみんなのほんまの思いを返していく。その営みの中から自分が歩んでいく方向やこの学習の意味が見えてくるんだと思います。決まり切ったことを言うのでなくて、自分の中にある本当の思い、しんどさや苦しさ、息苦しさや、ドロドロしたものを語り合いながら、そのことをきっちりと洗っていく、そんな生き方をみんなでつかんでいきたいと思います。続けてください。

NY(女)私は今差別をしています。自分で口で言ったり、作文に書いたりするときは、自分は全然差別していないとか、一生懸命差別をなくそうとしているとか書いているけど、行動にはなかなか出せなくて、身体障害者の人とかを見るとついつい目がいってしまって、やっぱりまだ差別する意識があるんだなあって思います。この意識はまだ自分で止められないけど、みんなで頑張っていけば必ずなくしていくことができると思うから、みんなで力を合わせてどんどん発表していって差別する意識をなくしていきたいです。

AF(女)私は５年生のときまで、道徳とかを習っていてもその場限りで終わったりしていて、差別する側に自分が立っていると思っていたから、そんなに興味もなかったけど、６年生になって初めて差別される側のことを考えてみて、本当にくやしい思いがわかってきたし、やっぱり差別はいけないと思うから差別をなくしていこうと思います。

TM(男)僕は学習会に行っています。でも、このことを言うのはちょっとなんか恐かったけど、今言うことができてすごくうれしいし、ＴＫ君が言ったように、僕も差別に負けていると思うから、差別に負けないように強い人になりたいです。

T4 ：今語ってくれた思い。みんなはどう聞くんですか。どう思うんですか。みんなのほんまの思いを返していくんです。ここに１年生全員が集まったということは、みんなのほんまの思いをぶつけ合いながら、自分がどう歩むか、どう生きるか。自分の中にある差別意識を洗ってい

くということは、自分の中にある差別意識と闘っていくということは、どういうことなのか。そのことをしっかりとつかんでいくんです。一人の人間の力というのはやっぱり弱い。一つのクラス、一つのグループの頑張りというものはやっぱり弱い。それを大きなものにしていくために、みんなの本心をぶつけ合う。本当の思いを語り合う。そういう時間にしていきたいんです。仲間が語ってくれたその思いにつなげてください。

TK(男)僕が思うには、差別されている側の人の気持ちになって、自分からそれを克服していくことが大切だと思います。それともう一つは、だれもが差別を許さないという気持ちになっていけば、みんなは平和で平等に暮らしていけると思います。

TK(男)僕は今まで自分が学習会にいっているということに自信を持っていたんです。でもお母さんから直接部落ということを知らされたら、自信があったけどつらい部分も出てきたと思います。僕にはまだ差別する意識があって、その意識が自分をつらくしていると思うんです。だからこのままだったらあかんと思うんです。僕は部落というのが寂しくないというように一生懸命発表しているけど、僕の心の中にはまだそうでない部分があります。僕はその心をずっと引きずっていくのは嫌だから、差別に打ち勝っていく力を自分から心を開いてつくっていこうと思います。

Ｔ５ ：そのために語り続けているんでしょう。みんなの中には空気を吸うように差別意識が入ってきて、みんな自身を苦しめている現実があると思う。小学校の３年や４年の頃から勉強してきた「ひかり」の学習や、今まで積み上げてきた部落問題の学習で、かわいそうな人たちとか、つらいだろうなあという思いしかみんなの中に届いてなくて、それが小学校の５年生や６年生になって自分がその立場だったと思ったとたんに苦しくなっていく。みんなにはそんな差別意識に押しつぶされるような生き方をしてほしくない。自分の中にドロドロしたものがいっぱいあって、なかなか思いを語っていくことができない人もいるだろう。その重苦しいものをみんな自身の行動によって、みんな自身の本当の思いを語るという行動によって、みんな自身を解放していくんです。語ることによってＴＫ君が変わっていきよる。仲間が変わっていきよる。その思いにみんなつなげてください。

AF(女)私が学習会は何のためにあるのかを知ったのは、６年生の道徳の時間でした。先生が学習会について語ってくれたけど、そのとき私の心の中には学習会に通ってなくてよかったという気持ちがありました。それを私は差別意識だと気づかずにずっといました。部落差別がなくならないのは、私のような意識を持った人がいるからだと思うから、私はこの場限りでなく、もっと考えてみんなに訴えていけるようになりたいです。

ST(男)僕が学習会に参加している子は部落の人間だと知ったのは、６年生の中頃みんなで必死に部落問題の勉強をし始めた頃です。そのとき僕は自分は部落の人間だったのかという思いもあったけど、部落がどうしたという気持ちがありました。そして、部落の人間はだれよりもたくましい人間と今では思っています。この前、学習会場でも学習会の仲間に語ったことだけど、今板野中学校の校訓が「自主・協同・責任」で、１年Ｂ組の級訓が「昨日の自分より今日の自分が好き」という級訓で、自分にもそんなものをつくろうと思って考えたんだけど、僕の目標は１人より２人が強い、１００人より１０００人が強いというのを目標にして頑張っていきたいです。

Ｔ６ ：ＳＴ君の発言につなげてください。

TK(男)差別される側にかわいそうとか、そんなこと言よったら、その人がどんどん悲しんでいく

から、そんなこと言い合う関係でなく、手を取り合って仲良くして自分から人権を持った人間として認め合える関係になっていかなあかんと思います。

NY(女)この資料に登場するＴさんは、最初びくびくして学習会はほとんどずる休みだったけど、こういう行動をとるＴさんにしたのは、みんなの差別の目だったと思います。その差別の目で見られるのが恐くて、学習会に行くのはものすごく嫌でたまらなかったけど、最後には堂々と胸張って学習会に行けたりしたから、私たちは今Ｔさんのように、強い心を持って差別の嫌な考えをなくしてほしいと思います。

Ｔ７ ：今資料に重ねて、ＮＹさん自身の思いを語ってくれました。仲間がどんどん語ってくれていること。それに重ねて、私は今こんな思いでいる。僕はこんな思いでいる。そんな思いをつないでください。

TY(女)私は作文など発表するときも、かっこいいことを言っていて、それでいいと思っていました。それに小学校のときだって、発表するときは下を向いていて、１回だけ発表してそれでいいと安心していました。また、中学生になって道徳の時間などは部落問題のことが中心で嫌だったけど、今はそのことを通して強くなりたいと思っているし、頑張ってみんなで一緒に語り合って分かり合っていきたいと思います。

Ｔ８ ：このことを考えたら、このことを話し合ったら心が重たくなる。そこにあるものをみんなで考えていこう。

EM(女)私は３年生ぐらいになって、学習会のことがわかってきて、私はそのときそういうところの子どもじゃなくてよかった。差別されるより差別する方でよかったと思っていました。今度からその心を直していきたいと思います。

YI(女)私は学習会に行っています。別に学習会に行っているとみんなに言ったって、恥ずかしくもなんともないんだけど、初めて私が部落の人間と聞いたときは、始めにくやしいという気持ちをつくってしまったら、私は差別される人間で部落外の人が差別している人間という線を自分からつくってしまうので、先に自分の差別意識をなくそうと思いました。みんなに問いかけて返事が返ってこなくても、みんなを信頼して何回も問いかけていきたいです。この中でも信頼できる仲間を増やしていきたいです。

Ｔ９ ：繰り返し繰り返し語ってくれる仲間にしっかりとつなげていく私になれ、僕になれ、本当の仲間になれ。それは言葉でない。本心を語るという行動によって、熱いものがみんなの中に流れていく。つなげていこう。

TK(男)僕は小学校のとき差別をなくそうとか口で言っていたけど、実際はいろいろ心の中にかくしていたことがいっぱいあったんです。差別をなくしていくというようなことを言ってきたけど、実際の生活では差別したことがあったし、口に出してかわいそうというようなことは言わなかったけど、心の中ではそんな気持ちがあったんです。でも中学生になって僕が心の中に思っていることを出していったら、強くなっている自分を確かめることができるんです。だからもっともっと自分の差別意識に負けないように自分の本心を語っていこうと思います。

SN(男)この資料についてなんだけど、Ｔさんを変えたのは学習会の良さだと思います。その良さというのは、部落の仲間が集まって、本当の気持ちを言い合える友達がいるから、このＴさんは学習会の良さで自分が変わったんだと思います。そして今、僕は学習会が一番好きです。それは学習会の友達みんなが同じ思いを持っているからです。だから部落ということは恐くありません。

T10：学習会場で語り合ったことがよみがえってくる。本当の仲間がいる。つながっていく仲間がいる。その大切な仲間の一人であるという誇りと自覚を持って本当にみんなで頑張り合いたい。その仲間につながっていく仲間と共に歩み続ける。みんなは一人一人であってほしい。つながっていこう。

MO(女)私が学習会のことを知ったのは、小学校４年か５年のときでした。そのときに私は学習会はいろんな部落問題について勉強していいところと思いました。その後５年６年で学習会のことを勉強して、前より学習会のことがよくわかって、私の中に差別意識ができてきたように思います。前にも発言したことだけど、学校の先生は学習会の通知をそっと渡したり、受け取った人もかくすというようなことは見たことがありません。そんなことから自分の差別意識は少しずつなくなっているように思います。中学校に入学してからも森口先生が担任になって、いろいろ部落問題について勉強してきたけど、最初は何かわからないけど、手を挙げて発表することができなくて、他の授業ではどんどん言えたのに、なぜか部落の問題になると下を向いて手を挙げられなかったけど、勇気を出して発表することによって、今のこの場でも話すことができました。これからも自分の心にある本当のことを言いたいと思います。

T11：つなげてください。

TM(男)学習会で東小学校出身の仲間が全員、総合センターに集まって話し合ったとき、５月２７日にある中間テストがいそがしくて来れないという子がいて、その話を聞いて僕はすごく腹が立って、中間テストも大事だと思うけど、部落差別があるから学習会があるんだと考えたら、もっと腹が立ってきて、それだったら学習会に参加して一日でも早く部落差別をなくして、学習会をなくした方がいいと思いました。

T12：部落はやっぱり重い。みんな前に授業の中でいうてくれたからはっきりと覚えとると思うけど、初めて給食の時間「今日学習会の開講式があります。それぞれの学習会場に参加してください。」と放送があったとき、そのときみんなはいろんなことを感じたと思う。あのときのみんなと、今のみんなはどうだろうか。今「学習会の友」という資料をベースにして話し合っています。部落問題について、学習会について、クラスで語り合ってきた。その話し合い中でみんな自身、一番最初に語ったとき涙があふれてきた。そのときの自分と、今頑張っている自分と、自分にとって何が本当に大切なんだろうか。今ＴＭ君が語ってくれた。部落問題の学習をするということは、みんなにとってみんなが生きていく上で、どういう意味があるんだろうか。何のために、この学習をするんだろうか。みんなの思うことを語り合いたいと思う。そして、本当の仲間が増えていく、本当の思いを語り合える仲間が増えていく時間にしたい。

YS(男)僕も最初の頃は学習会をさぼっていて行かなかったけど、学習会に行っているみんながさそってくれたので、うれしくなっていけるようになりました。僕はこの前に給食の時間に学習会があると放送してくれたとき、ＴＫ君が一緒に行こうなと言ってくれたから行きたくなって、行けるようになったからうれしかったです。

MN(男)僕は小学校のとき、学習会について勉強したとき、心にないきれい事ばかり言っていたけど、中学生になって森口先生の担任のクラスになって話を聞いているうちに、段々と本音も言えるようになってきたので、これからも本音を言っていきたいです。

T13：一生懸命に語ってくれた仲間にこれが私のほんまの思いです。私は本当に頑張りたい、歩き続けたい。そういう思いを返していく、それが授業なんだ。授業というのは、みんなが一生懸命心に汗をかいて、一生懸命にほんまの思いを語って、その思いをつなげ合い、みんなでつ

くっていくものなんです。誰かが語ってくれるのではない。私が語る。私がつくるんだ。今いっぱい語ってくれる仲間にみんなはどう返していく。どう頑張ろうとしていく。この場で手を挙げて発言するということはものすごい勇気がいる。その勇気を持って必死に差別をなくしていこうとする仲間にどうつながっていく。どう連帯していく。いいですか。学習会に寄せて、この資料に寄せて、私は今こんな思いを持っているという、みんなの思いを語り合いたい。頑張りましょう。歩かなければ道はできない。「峠」の旗をみんなに紹介したでしょう。歩かなかったら足跡は付かない。みんなで歩いていこう。

KT(女)私は学習会に行っています。この前、総合センターで東小学校出身の１年生全員で部落問題について学習会をしたとき、ＳＮ君が差別についての気持ちで、部落という重さや苦しさが１００％あったけど、部落問題学習をする度にその重さが軽くなってきたと言ってくれたけど、私も部落という重さが、１００％から段々と軽くなってきて５０％ぐらいになっています。それでちょっと違う話になるんだけど、森口先生が言ってくれたように部落問題を考えるときに涙が出るというのは、自分自身を責めたり、部落の人を責めたりしているからだと思います。私も一番最初の部落問題学習のときは、涙が出そうになったけど、今はその涙が出そうな気持ちが３分の１ぐらいに減っています。これからは１００％から０％まで減らしていこうと思います。

Ｔ14：一歩一歩前進していこう。昨日の自分より今日の自分が好きになっていく。毎日みんなは自分が好きになっていく。そんな生き方をみんなでしていこう。

KM(女)私は学習会に行っていて、２年生頃から学習会のことは知っていました。でも、そのときは別に何も思わなくて、ただ何かをしているのだと思っていたけど、今は学習会に行っている意味が分かるようになって、学習会へはあってはならない差別をなくすためにいこうという気持ちで頑張っていこうと思います。

AS(女)私はいつもこの話になると黙り込んでしまって、心が重たくなるんだけど、それは私の心の中にある差別意識が私を苦しめているんだと思います。その差別意識をなくすために、私はたくさんの人の前でも頑張って自分の気持ちや心の中にある本当のことを言っていかなければならないから、頑張ってこれからも言っていきたいと思います。

YO(男)僕は差別されている地域の人とか、されていない地域の人とか関係ないと思います。一生懸命に差別に立ち向かったら差別はなくなっていくと思うから、一生懸命思いを言ってくれるみんなにつながるように頑張っていきます。

TM(男)勇気を出して発表しようとみんな思っていると思うけど、その勇気を出して言おうと思うことは、本当に正しいことだと思うから、何もおかしいこともないし、誰も笑ったりしないから、みんなで発表していってどんどんいろんな仲間を増やしていきたいと思います。

SN(男)小学校のとき、放送でよく「学習会に行っている人は公会堂に集まってください」という放送があったけど、そのとき僕は今日も学習会があるんかと思っていたけど、中学生になってからは給食の時間に学習会があるという放送が入ったら、僕は今日学習会があるから急いで学習会に行こうという気持ちに変わってきました。それは学習会に行くのは、差別をなくしていくことだから、差別をなくすのは、努力が必要だから、一日でも早く差別をなくそうと思うからいろんな努力をしていきたいと思います。

TK(男)前の道徳の時間にＳＮ君が言ったことを言います。「差別される側の人が学習会に行くのではなくて、差別する側の人が学習会に行った方がいい」と言っていました。そして、ＳＮ君

が言ったように差別する側の人が真剣に部落問題を学習していくようになったら、みんな楽しい生活が過ごせるようになると思います。

T15：今のＴＫ君の発言をみんなはどう受けとめましたか。今の発言について意見を言ってください。

YI(女)今の意見を聞いて、私は差別している方が学習会に行ったら、学習会に行っている私たちの頑張りがとても弱くなると思うんです。昔の話になるけど、今ここにいる学習会に行かなくていい人が差別したんではなくて、差別があることによって両方が苦しくなってきたと思うし、今この学習をしているように学習会に行っている子も行っていない子も、助け合って頑張っていけるようになりたいです。この中で差別している子、差別していない子と区切りたくないです。

NY(女)さっきＭＯさんが言ったことにつながるんだけど、今みんなが手を挙げられないのは、頭の中でこれを言ったら変に思われるとか、これは言わない方がいいとか、考えているから言えないんだと思います。そんなことは誰も気にしていないから、みんなで手を挙げていったらいいと思います。

MK(男)僕が思うには、みんな一人一人を大切にしたらいいと思います。それと人間の価値はみんな同じだと思うからみんなを大切にしていきたいです。

TK(男)僕はこの中学校でいつ部落差別を受けるかわかりません。それは差別をする方が決めることだけど、自分が差別を受ける苦しさを考えたとき、僕自身部落でない人とどこが違うのかとみんなに聞いたんです。そのときこういうふうに思いました。何もかわいそうなところはないし、ただ差別している人が勝手に決めているだけと僕は思うんです。僕は差別しているような人間に負けない人間になろうと思います。だからもっともっと思いを強くしていこうと思うんです。僕はこれからこの３年間、学習会でずっと勉強していく中で、部落差別に絶対負けないように自信を持って一生懸命頑張っていこうと思います。

T16：学習会の仲間がどんどん語ってくれたけど、みんなを強くしたものは何だろうか。ＴＫ君がそれだけ語れるようになったのは何からだろうか。ＳＮ君が頑張れるようになったのは何からだろうか。ＴＭ君がそれだけ頑張れるのはどうしてだろうか。ＫＴさんが今思いを語れたのは何がきっかけになったんだろうか。ＹＩさんが繰り返し繰り返し思いを語っていけるのはどうしてだろうか。最初、このことを思っただけで心が重たくなって、目に涙がたまって、涙がこぼれそうになっていたのが、きっちりと言葉を返していけるようになったのはどうしてだろうか。やっぱり先生にとっても部落差別は重い。みんなの父さんや母さんにとっても重い。私には二人の娘がいるけど、やっぱり部落は重い。二人の娘に堂々とした生き方をさせたいと思う。ほんまの仲間をいっぱいつくってやりたいと思う。生まれた場所や生んでくれた親を差別していくような生き方だけは絶対にさせたくない。おのれというものに、自分の生命に誇りをもって生きていく生き方をさせたい。そういう願いが集結して学習会という営みが始まった。本当に目覚めなあかんのは今さっきＴＫ君が言ってくれたように差別する側の人間です。しかし、踏まれた人間が腹の底から怒りをぶつけて痛いと言わなかったら、その悲しみや苦しみが伝わっていかないのが現実です。私たちは部落に生まれた、部落に生まれなかったという世界を超えて、差別する側の人間を巻き込んで一緒に差別をなくしていく生き方をつかんでいきたいと思う。自分にとってこの学習はどんな意味があるのか。みんなの心の底にあるものを一番苦しいものを仲間と共に語り合って、今までみんなを苦しめてきたものを解き放っていく、そ

んな学習にしていきたいと思います。そして、自分という人間に誇りと自信を持っていく。そんな時間にしていく。そんな話し合いを続けていく。それがここに１年生全部が集まった意味です。今日仲間の話を聞いて、友達の話を聞いて、こんなことやっぱり思う。こういうふうに思う。そのことをまた次の時間１年生全体で語り合いたいと思います。また語り切れていない人、重たいものに耐えている人、自分の意志で手を挙げて自分の思いを語るという行動によって、自分を解放していこう。自分を誇りあるものにしていこう。みんな自身の行動によってみんな自身は本当に変わっていく。

AK(男)小学校６年ぐらいのときに初めて、部落差別のことを知って、そのときは下を向いていて１回も発表できなかったけど、中学校に入ってからはちょっとずつ発表し始めたので、これからも少しずつでもいいから頑張って自分の気持ちを語っていきたいと思います。

SO(男)僕は部落問題の学習をして、人間一人一人がどれだけ大切なものであるかがわかってきたと思います。それで思うことなんだけど、柔道や空手やボクシングは、人を痛めつけ合うスポーツで、何でそんなスポーツができたのか腹が立って、それでそんなことするんだったらボールの受け合いをして遊んだ方が心が通じ合っていいんじゃないかと思います。

Ｔ17：今柔道とかボクシングの話をしてくれたけど、目に見える部分では、そういうたたき合いとか、傷つけ合うことをするのかと思うかもしれないけど、その競技の底に流れているのは、相手を大切にする、相手と尊敬し合う関係があるんです。だから殴ったり投げたり首を絞めたりする行為がルールの中で認められているんです。そんな厳しい行為が許されているのは、相手をものすごく大切にすると言う思想がその競技の底に流れている。人間の社会につながる部分はそこだと思うんです。人間は尊敬し合ったり大切にし合うという人間と人間の絆、結びつきがとても大切だと思うんです。差別をなくすということは、人間が人間としての尊厳を大切にし合い守っていくことだと思うんです。人権というのは自分自身を大切に守っていく権利であり、他の人の尊厳を力強く守っていく権利です。そのことをみんなと学んでいるんです。人を差別しないということは、自分自身を差別しないということです。それは自分自身に誇りをもつことです。人を大切にしていくということはいつまでも自分を大切にしていくことです。それは生きていく根本なんです。部落問題学習はこのことがきっちりととらえられたら、みんなは本当に確かな生き方ができるんです。

NY(女)資料に出てくるＴさんが、恐くて学習会の通知などをかくしていた気持ちは分かるような気がするけど、最後の方でＳ君やＫさんやＮ君が出てきて、その友達に支えられて強くなっていたように、私たちも一人じゃないんだから、みんなで差別も一緒になくしていきたいと思いました。

Ｔ18：これだけは言っておきたいということがあったら発表してください。

TK(男)僕は心の中に差別をもっていることをみんなに語ってその差別と闘おうとしています。みんなも僕と同じように差別意識を持っていることを今日語ってくれて、そのことをなくしていこうとしていたことがものすごくうれしかった。これからもうれしいことや悲しいことやいろんな思いを感じていくだろうけど、みんなと共に差別に打ち勝っていくすごい力をつけていって、みんなで一生懸命成長していきたいと思います。

Ｔ19：いろんな思いがあふれたＢ組の授業これで終わります。この後６時間目は、１年生全体と今日参観にきてくれた先生方にも参加していただいて、差別を本当になくしていく話し合いをしていきたいと思います。

１９９４年度第１学年第１回全体学習・全体授業の記録（板野中学校１年全体）

主　　題　「差別解消の主体者として」　　１９９４年５月１９日（木）

資　　料　「学習会の友」　　授業者１年全体　森口　健司

Ｔ１：それぞれのクラスでいろいろな話を担任の先生から聞かせてもらいながら、また仲間の思いを聞きながら、それぞれのクラスが頑張ってきた。その営みを一つに束ねて大きな力にしていく。授業とはみんながみんなの思いをしっかり語り合って、心にいっぱい汗をかきながらつくるものです。先生にしてもみんなにしてもやっぱり差別というのは重くて、涙を引きずってしまう。学習会で話し合ったら、一緒に来ている先生の眼に涙がたまってくる。その涙がやっぱり差別の重さを象徴していると思う。しかし、みんなにはそれを乗り越えていく力がある。その力をみんなでより大きなものにしていく。それがこの学習の意味だと思う。学習会に寄せてＢ組の仲間が語ってくれたこと、その思いに重ねて、みんなの思いを出し合う授業にしていきたいと思います。大勢の前で発言するということは、勇気がいるし緊張もするでしょう。しかしそれだけに喜びも大きい。みんなにとって大きな自信となっていくと思います。みんなでみんなの心の中にわき起こってきたほんまの思いを語り合いたいと思います。本当の思いを語ろうとするとき、大きく息をする。学習会でもそうだった。でも、みんなで頑張っていこう。みんなで越えていこう。絶対につなげていく。つなぎ合うんよ。いいですか。それでは挙手してください。

YM(Ｃ男)言ってもいいですか。言いたいことが４つあります。全部バラバラですけど聞いてください。僕の心の中にも差別意識があります。でもだいぶ分かってきているので差別することをやめることはできます。差別はつくってしまうこともできるし消していくこともできます。僕は学習会で段々差別について分かってきているので、できるだけ差別をしないようにしたいと思っています。僕が小学校のとき南小学校へ転校してきて思ったことは、学習会は学習会へ行っている子だけでする会と思っていました。それで学習会の勉強をする度に、学習会に行きたいなあと思っていました。それである話し合いの時に、ＨＵ君と何か一緒にできないかと思って話し合いました。でもすることがあまり見つからなくて、学習会場の自転車を並べたりしていました。そのときはそんなことしかできませんでした。学習会のことはＹＯ君に聞いてよく分かってきました。今、学習会に参加するようになって本当によかったと思います。思い切って今思っている心とかを十分に出していきたいと思います。それと学習会に一緒に行っている友達は、ほんまの友達が横にいるという感じがしていいなあと思います。一人だったら不安とかが先に来てしまって、正々堂々とまっすぐに向かって言うことはできないところもある人も多いと思います。でも、二人で行く、三人で行くということは、すごい自信がつき生活が楽しくなります。まだ友達ができていない男の子も女の子も心開いて友達をつくってください。それとＳＯ君が言ってくれたけど、柔道とか空手は痛めつけるのではなく、やっぱり勝負の一つとして自分の力を示すようになっているのであって、本当の勝負の一つとして技を競っていくから、友情が生まれたり絆ができたりして仲良くなっていくことができるのだと思います。表面的には残酷な感じを受けるかもしれないけど、決して悪いことではないので頭に入れておいてください。

Ｔ２：仲間と一緒に参加するということで言っておきたいことがあります。ＹＳ君がさっきの授業でＴＫ君が学習会にさそってくれてうれしかったと言ってくれたけど、それはＹＳ君だけの

喜びではない。それはＴＫ君の喜びでもある。ＹＳ君が学習会に参加できたという子とはさそったＴＫ君にとってもすごくうれしいことです。声を掛け合うことって両方に喜びが広がっていくし、共に頑張っていくということはその両方にその喜びが広がっていくと思うんです。この時間はみんなの時間です。今語ってくれたＹＭ君やＢ組の仲間の喜びがみんなの中に広がっていくようにみんなの思いをつなげてください。

IM(Ｅ男)僕が学習会のことを初めて知ったのは、小学校６年生の半ば頃でした。あのとき本当は学習会に行ってなくてよかったという気持ちがありました。でも、部落差別の勉強をしていく中で、僕はあのときの自分に腹が立つようになってきました。僕はこれから学習会に行っている人と仲間になって、差別をなくすように取り組んでいきたいと思っています。

Ｔ3 ：この学習を通して今まで見えなかったものが見えてきますね。

ME(Ｅ女)私は道徳や「ひかり」（小学校部落問題学習副読本）の勉強をすることが大嫌いでした。なぜかというとその勉強をしていると、ひどい目にあった人たちのことが出てきて、そのことを考えると胸が苦しくなったり、腹が立ったりするからです。それはみんな思っていると思います。でも私はそのことについて発表することがとても苦手です。だからいろいろと発表しようと思っていても、なかなか心で思っていることを表現できなくてとても困っています。でも中学校に入ってから、先生の話を聞いていても、やっぱり委員長だから発表しなければいけないという変な気持ちを持ってしまいます。でも今腹が立っていることや悲しんでいることは、委員長だから言っているのではなく、私自身の意志で言っています。みんなも自分の意志で自分から思うことを言っていったらいいと思います。

Ｔ4 ：はい、ありがとう。みんなの思いをつないでいこう。

MO(Ｄ女)話がずれるかもしれないけど、私は学習会に行っている子は一体だれなんだろうと思うことはなかったけど、同和地区ってどこなんだろうと考えることがありました。だけど、小学校６年生の時に先生が「日本中どこを探しても同和地区はありません」と言ったとき、なぜかドキンとしました。今まだその理由は分からないけど、同和地区っていうのは日本中どこを探してもないことをみんなに言いたかったです。

Ｔ5 ：今みんなとなくしていこうとしている部落差別、その差別を受けている同和地区ってどこにあるんだろうか。

TT(Ｅ男)みんなの心の中にあると思います。

Ｔ6 ：みんなの意識の中にあるのかな。その人を見て同和地区の人だと見ていく意識。その特定の場所を見て同和地区だと見ていく意識。そしてそこは違う、その人は違うと思って差別していく意識。今ここでみんなの心に潜んでいるそんな意識を堂々と語ることができたら、みんなの中にある差別意識は少しずつ少しずつ洗われていく。そんなみんなの中にある差別意識を洗っていこうとする姿が、多くの仲間に伝わり広がっていくことによって、みんなの中には堅い連帯の絆ができていき、みんな一人一人の大きな自信を与えていきます。そのことによって、私は私でよかった、僕は僕でよかったという人生が開けていくと思うんです。みんなの本当の思いをつなげてください。

YI(Ｂ女)話し合いは多いけど、今のままではあかんと思います。差別をなくすために何もしないし、文句を言いたいときに自分がこの言葉を言ったら、差別になると分かっていて我慢できなくて言ってしまうときがあります。それに私は今までＴ先生やＵ先生よりすごい人間にあったことがありません。そのＴ先生やＵ先生よりすごい人間に私はなります。今の小学校６年生は

すごく頑張っていて、負けそうなくらいだけど、今の６年生の子が中学１年になったとき、やっぱり先輩ってすごいなあと思われるようになりたいです。１年生の中にいろいろな先生の話を聞いていると、この先生は言っていることと、していることが違うと思う先生がいます。そんな先生には話し合いの時には、私は先生というのを捨てて、先生の醜い部分だって私たちと一緒に洗ってほしいと思います。

MO(Ｃ男)ちょっと話は変わるけど･･････、僕は学習会に入っています･････。（涙）この前、学習会で部落問題のことで････････、（涙）思い切って発表しました･････。それでちょっと自信がついて････････、一つの峠を越えることができました･････。その自信がついたので･････、今ここでみんなに話せるようになりました･････。（涙）だからこれからも発表していきたいです。そして、部落問題のことを･････、一生懸命に考えてなくしていきたいです。

Ｔ７ ：はい、ありがとう。今の思いみんなはどう聞きましたか。今の思いにみんなはどう思いをつなげますか。

TW(Ｃ男)僕は小学校５年生ぐらいまで、学習会って何をするところかなと思っていて、友達に聞いてみたら、勉強するところって聞いたから、最近まで学習会は勉強するところと思っていて、いかんでよかったなあと思っていました。最近、学習会のことを勉強して、学習会は差別のもとについて話し合ったりするところというのがわかってきて、学習会って大切なところだと思うようになってきました。

NN(Ｄ女)私は自分のことを顔も心もきれいな人間、醜くないってずっと思っていました。みんなの前できちんとうまく言えるし、自分の言いたいことがはっきり言えるから、そういうこと全然気にしていなかったけど、小学校６年生の時、担任のＫ先生に部落問題の学習で学習会に行っている人は部落の人間だと教えられたときに、私は学習会に行っている人に対してあの子が部落の人だということを意識してしまって、何かすごい同情みたいなものが生まれてきた気がします。そういう心が私のうぬぼれをつくっていったと思います。私の心の中にはいっぱい差別する意識があるけど、その中で今日、今ここでみんなの前で私の思ったことが言えてすごくうれしく思います。そして、ＹＩさんが言ってくれたように、間違ったことは先生、生徒、関係なくはっきり言っていきたいと思います。

Ｔ８ ：先生もみんなも差別意識と闘い続けていると思う。それが生きることの意味だと思う。みんなの思いつなげていこう。

HF(Ｄ女)私は小学校の６年生の始めの方は下ばっかり向いていたんだけど、今はだいぶ上を向いていけるようになりました。上を向いていけるようになったのは、支えてくれる友達がいたからだと思います。支えてくれた友達を大切にして、みんなで差別をなくしていきたいと思います。

YM(Ｄ女)私ははっきり言って小学校６年生の１学期頃は、差別する側に立っていたと思います。それは道徳の授業とかも下を向いていたし、それにこんな勉強して何の得があるんだとか、ずっと間違った考えばかり持っていて、そんなときは自分が間違っているなんて全然思わなかったし、私が変われたのは板野町に来れてからです。私は前に藍住町に住んでいたけど、はっきり言って藍住町に住んでいた友達は、みんなというほど差別していました。その中には板野町のこともありました。部落が多いとか、友達が板野町へ行ったら友達を選ぶの大変だろうとか、今思ってみれば間違った考えばかりで、最初の方はこの場で言うのをためらいました。でもたった一つだけ気持ちが変わりました。そのわけというか、変われた理由は私を支えてくれる人

がいたからだと思います。みんなが話し合いの場に参加していて、小学校６年生の時の担任のＫ先生もみんなと一緒に取り組んでいってくれたから、私は差別する気持ちをなくせたのだと思います。だからみんなにもいろいろ発表してもらって、私みたいにまだ差別する意識が残っているかもしれないけど、差別をなくすように取り組んでいってほしいです。

NM(Ｄ女)私は今も学習会に通っています。もちろん部落の人間です。でもみんなの前で部落の人間だと胸を張って言えます。でも、自分は差別しないという立場に立っているのではありません。私は差別する意識を絶対持っています。身体障害者の人に対する差別など、いろんな差別をしてきたと思います。でも中学生になって少しずつ差別する意識は小さくなっていると思います。みんなが私の心を支えて励ましてくれたから、中学校に入学してから今まで差別をしてきませんでした。でもちょっとした悪口や友達を傷つけるようなことを少しはしてきました。そんな自分はとても醜いです。けれど、これからは差別する側、差別している人に呼びかけるだけでなく、その人の気持ちを支えていってあげようと思います。

KA(Ａ男)僕は二つ言いたいことがあります。一つはこの授業の最初にＹＭ君が言ってくれたように、格闘技は一見醜い争いのように見えるけど、その格闘技に取り組む人の心の底には、心と心のつながりがあるし、その闘うというところは、差別と闘うということに似ていると思います。格闘技は自分を守るためにあるのであって、人を傷つけるものではないと思います。それと、差別という相手からの攻撃に対して、自分を守り相手を変えていくような方向に持っていける人間になりたいと思います。それと僕にもたぶん部落の血が流れていると思います。けれど、自分は皆と同じように赤い血が流れています。だから差別は仲間と仲間が自分を見失って争っている愚かなものだと思います。だからみんなで頑張っていけばそんな愚かなものをなくしていくのはたやすいことだと思います。だから僕は頑張っていきます。

Ｔ９　：みんなが部落であるという証拠はどこにあるんだろう。みんなが部落でないという証拠はどこにあるんだろう。このことはよくみんなに話をするんですけど、この学習を徹底的にやっていったら、部落の仲間が増えていく。「部落に生まれたことがどうした」と言える人間、自分の中にある差別意識を洗っていくことができる人間、そんな人間になっていくことによって、これは生涯かくし続けていくことだと思っていたことが、自分の誇りが生まれてきて、堂々と生きていくことができるようになっていくんです。そして、みんなを育ててくれたお父さんやお母さんにしっかりと思いを返していくことができる。お父さんやお母さんのひたむきな生き方をみんなの誇りにしていく。みんなにはそんな力がある。みんなの思いつないでいこう。

TF(Ａ男)僕は今まで身体障害者の人とかを見たら、「かわいそうやなあ」と思っていました。でも６年生ぐらいでそれが間違いであるということに気がついて、それからその人たちと同じ立場に立って頑張っていきたいと考えるようになってきました。

YS(Ａ男)ＴＦ君やＫＡ君とは話が変わるけど、この５時間目の授業を見ていて、僕は最初、Ｂ組の子はすごいなあと思っているだけだったけど、この６時間目になって何か言わなければと思いました。僕は今手を挙げることができて、今みんなに自分の気持ちを言えたことがとてもうれしいです。だから、これからも発表していきたいと思います。

Ｔ10：クラスや学年の仲間がこれだけ手を挙げて発表していく。そのことに力がわいてきますね。全員に発言の機会を保障したいと思います。今一人一人が発表してきたように誰かが始めなければ、何も始まりません。その第一歩を踏みしめていくことができる自分になっていこう。

MI(Ａ女)私は学習会に行っているんだけど、ときどき私たちが教科の学習をしているのを「いい

なあ」という子がいるんだけど、部落問題学習は差別をなくしていく学習だから、学習会で教科の学習をしているのは、今まで差別によって勉強する機会を奪われてきたおじいちゃんやおばあちゃんたちの分も取り返すためだと私は思っています。これからも教科の勉強も、部落問題学習も頑張っていこうと思います。

MK(Ａ女)私も学習会に行っているけど、そのことを恥ずかしいと思ったことはないし、どうして恥ずかしいと思わなければいけないのかと思っています。ときどき部落問題学習の時は、下を向いてしまって部落出身ということを恥ずかしいと思ったこともありました。でも今は堂々と胸を張って言えるようになったし、これからも逃げないで自分の本当のことを言っていきたいと思います。

AK(Ａ女)私は今までいろんな差別をしてきたと思います。障害を持っている人を見たら、何かすぐに目がいったり、その人の性格は分からないのに、顔だけで決めつめたりして、いろんな差別をしてきました。なかなかそれは直らないんだけど、少しずつみんなと直していきたいと思います。

KM(Ａ男)僕は学習会に行っています。小学校２年や３年の頃は、何で行っているのかも知らなかったし、学習会に行っていることは何も思わなかったけど、小学校５年や６年になって部落差別とか、いろいろみんなで勉強してきて、いろいろなことが分かって頑張っていこうと思いました。ＭＫさんが言ったように僕も、差別から逃げたくないし、何が恐いものかと思ってみんなで頑張って差別をなくしていける一人になりたいと思います。

MK(Ｃ女)私はずっとつい最近まで、差別は私には関係ないと思って、身近に差別があるということも知らないで、何かテレビの中の世界にあることだと思っていました。小学校６年生の時に知らないこと、関心を持たないことは差別することにつながると知って、私は身近に差別があることを知らなかったので、私の姿は差別していることにつながると思いました。小学校６年生の時にＭＭさんが言ってくれたことで、私は他の町の人たちから板野町が差別されていることを知りました。そのときはすごくショックでした。私は差別していないと言い切れないし、これからも大人になって差別をしないと言うことは言い切れないと思います。だからきれい事で「差別をしない」とか「差別を絶対なくす」とか言うのではなくて、私は自分自身のことができていないから、まずみんなの前で私の本当の気持ちを話せるようにしたいと思います。

YM(Ｃ男)僕は小学校４年生の２学期まで、ずっと友達にいじめられてばかりいました。そして、家に帰っては泣いてお父さんに頼ってばかりでした。でも４年の３学期ぐらいから喧嘩をするようになっていきました。徳島から板野へ家を変わるようになったとき、徳島の友達から、「あそこで喧嘩するのはやめとけよ」とか「他のところに変わるようにしたら」とか言われたけど、お父さんが板野出身なので、「板野にいかんか」とか「あそこは差別とかがあるけど、別に対してかわらん。俺を見てみい、ちゃんとここまで生きてきただろう」とか言ってくれました。そして板野に来てやっぱり徳島でいたときの癖がでてきたのは、最初ＹＳ君と喧嘩をしてしまったことでした。その喧嘩の後僕はいい気になっていました。でも、部落問題について勉強していくうちにみんなが強くなって、僕はいろいろと僕のしていることを責められるのが嫌で２回も学校から逃げていってしまいました。でもみんなが止めてくれたのがうれしかったです。特に最初に喧嘩をしたＹＳ君が一番に飛び出してくれたのが僕はとってもうれしかったです。そして、小学校６年生になって勉強していくうちに、板野に来てよかったなあと思うようになったし、板野についていろいろ言っていた徳島の時の友達にも、その間違いを話してい

けるようになってきたと思います。今中学生になって僕は生意気になったと思います。徳島の小学校でいたときの自分の戻っていると、自分で分かっているのにこの前も喧嘩をしてしまいました。この前のＨＵ君との喧嘩もそんな感じで喧嘩になってしまいました。分かっているのにするということは、相手をなめとることなので、やっぱり自分をちゃんと見てもらうためにも、自分自身が納得のいく生活をしていかなければいけないと思います。

KY(Ｃ男)僕は中学校に入る前はよく友達と遊んでいたけど……、友達を自分の家に連れてくるのがとても嫌でした。それはよく祖母が……（涙）自分の家にきた友達に「どこに住んどん」と聞きます。以前はそのことが部落差別のためだとは知らなかったけど、（涙）学校で部落問題を学習して……、祖母が住所を聞くのはその友達が部落か部落でないかを確かめるためだと分かって……、（涙）自分の家に友達を連れてくるのが恐くなってきました。祖母に友達のことを住所を聞いてとやかく言うのはやめてと言っても……、差別することが間違いであることに気づいてくれません……。僕は今みんなと学習しているこの学習会のことについて、一生懸命話をしても……（涙）「お前それだけ一生懸命になって言うほどのことか」と言われて……、「もっと勉強に集中してみい」と言って僕の言うことを頭から押さえつけてしまいます……。僕は小学校の卒業式の日も、とても泣きたいくらいつらかったけど……、（涙）家に帰ると「お前そんなん泣くほどのことか」と言われて……、自分には自由がありません。僕は今まで部落を知らなかったから……差別をしたことがないのでなくて……、たとえ部落というのを知っていても僕は部落を差別しません……。僕は学習会はとても大切なところと思っているけど……、家の人はそのことをまったく分かろうとしてくれません。そのことがとてもつらいです……。だけど学校なら僕のこの気持ちを聞いてくれる先生や友達がいるから……、僕にとって学校はとてもいいところです……。もし、僕は学校がなかったら……、僕はずっと差別するのは当たり前という気持ちで生きてきたと思います。僕はまず、自分の家から自分の力で……、どうにかして部落差別をなくしていきます。

NN(Ｄ女)私もＫＹ君と同じように家に帰って差別のことを話すと、「そんなこと真剣にするなら勉強をもっと頑張れ」って言われます。でも私の中には差別をしてしまう意識がまだあります。なぜなら、小学校１年生ぐらいから人に命令されて動いてきたため、私の中に命令したいという気持ちがあるからです。でもやっぱり部落差別などは絶対したくないと思います。なぜなら同じ人間を上と下に区切ることはないと思うからです。それに同じ人間をどうして上と下に分けるのかと思います。でも私も少し差別をしているので、もしかすると生意気だと思われているかもしれません。でも私も差別意識をなくしたいです。でも私も差別しているのであまり人のことをとやかく言うのは嫌です。だから私のやっている差別からなくしていきたいです。それで人に言える自信がついたら、差別をしている人に声をかけていきたいです。

YN(Ｄ女)私はこうやって話し合っている中でいろんなことを思っているけど、生活ノートとか「あゆみ」に自分の気持ちを書くときは、やっぱりきれい事を書いてしまいます。それだったらいつまでたっても部落差別のこととかは解決できないと思うから、ずっと真剣に考えていこうと思います。

YM(Ｄ男)僕は小学校のとき学習会に行っていました。道徳の授業の学習会も嫌いでした。それはなぜかというと、小学校６年生の時、担任のＩ先生が部落問題について話してくれる度に自分の胸が苦しくなっていったからでした。僕は部落問題のことを聞くと苦しくなる、そのことが嫌でたまりませんでした。それは部落差別から逃げることばかり考えていたからだと思います。

僕はずっと逃げることばかりで前向きに生きていくことを知りませんでした。でも今はこういう話し合いをして、みんなの意見を聞いてやっぱり逃げたらいかんと思いました。僕は差別をなくしていくために、僕たちに一番必要なことはまず第一に発言力をつけることだと思います。だから僕もみんなのように自分の意見をしっかりと言って、間違っている人に間違っていると言える人間になっていきたいです。

TS(Ｄ男)僕もＫＢさんみたいに、自分から差別をなくしていきたいと思います。そして、差別する心が自分の中からなくなったらみんなに声をかけていきます。

HO(Ｄ女)私は学習会に参加しています。でも嫌だと思ったことはありません。なぜかというと、学習会にいると本当のことが言えて、自分と同じような考えの人がいるような気がするからです。だからこれからも学習会に行こうと思います。

MU(Ｄ女)私はいつも答えは中途半端なままです。小学校のとき、Ｔ先生に「答えは正しいと間違っているしかないんだよ」って聞いて、そうだなあと思いました。差別にあったとき、中途半端な答えだったら、また差別がどんどん増えていくからだと思いました。私は中途半端な人間にはなりたくないから、差別に立ち向かっていきたいです。

YK(Ｄ男)僕はここで発言することは、差別をなくしていく第一歩だとみんなの発言を聞いて分かりました。このマイクを持ってみんなの前に立つだけで緊張します。でも、ここで今発言できたことがうれしいです。

NN(Ｄ女)私の心の中にある差別する心について言うと、もし私が会社の社長になったとしたら、身体障害者を絶対に雇いたくないなあと思います。それは手のない人とかを毎日見ていると嫌な気分になると思うからです。そんな心が私の中にあります。私はこれから私の中にあるそんな意識をなくしていきたいと思うけど、なくせるかどうかはっきりと言えません。けど、今日みんなが言ってくれたことやこれからの学習を通して、私の中にある差別する心をなくしていくように全力で頑張っていきたいと思います。

YN(Ｄ男)僕は以前、板野町には住んでいませんでした。小学校３年生の時に板野南小学校に転校してきたんだけど、板野に変わってくるとき、友達に「板野町って差別が多いけん、差別されようになるなよ」とか言われて、そのときは何とも思わなかったけど、転校してきた３年生に頃は、みんなから責められただけで教室の隅や音楽室のところに行っていじけていたけど、そんなときみんながすぐに来てくれてうれしかったです。小学校５年までは、道徳や「ひかり」の勉強はあまりする気がなくてまじめに聞いていなかったけど、６年生の時にＴ先生が担任になって、Ｔ先生は自分の本音も言ってくれたし、僕も自分の本音も言えるようになりました。これからも本当に思うことを言っていきたいと思います。

YK(Ｄ男)僕は今まで差別のことに関心を持ったことがなく、どうして差別のことなんかを勉強するんだと思っていました。しかし、僕は心の中で「このことは自分に関係あるんだろうか」って思うことがありました……。僕は今みたいに発表しているときや作文を書いているときは、かっこいいことばかり言って実際は何も考えていなかったし、言ったことを行動に移すこともありませんでした。今思うと自分がとても愚かに思えてきます。でも、僕の心の中にも段々と差別を許さないという心が芽ばえてきているようにも思います。僕は障害者を差別したり、部落の人を差別する人は、「心の障害者」だということを忘れないでいてほしいと思います。

NO(Ｄ男)僕は小学校の頃、かっこいい言葉ばかり考えて差別のことを本音で言うことはありませんでした。中学生になってから僕はＹ先生のクラスになって初めて部落差別というのは、本当

に醜いものであるということに気づきました。

TO(Ｅ女)私は差別の問題を考える授業はあまり好きではなくて、そういうことに関する発表もあまりできませんでした。作文を書くときとかもかっこいいことばかり考えて、書いたことを実行したことはありませんでした。みんなが今日本当に思っていることを言ってくれたように、私も自分の本音を言っていける人間になりたいです。

HT(Ｅ女)私は中学校に入学して友達ができたとき、すぐに家族の人に言いました。でもおじいちゃんやおばあちゃんは一番最初にその子の住所を聞いて、……（涙）……。「同和地区の子とはあんまり仲ようせられんでよ」と言いました。私はとてもくやしくて、何か言い返したかったけど、何も言えませんでした。これからは言い返されることを恐れず、いけないことはいけないと言いたいです。

HH(Ｅ男)僕は差別のことは考えていたつもりであまり考えていませんでした。何て言おうか、言うこともかっこいいことばかり言って、あまり実行していませんでした。小学校の頃はなかなか本心を言うことはできなかったけど、中学生になって今言えたことをバネにもっともっと差別のことを学んでいきたいです。

KK(Ｅ女)私は学習会に行っています。２年生の頃から行っているんだけど、その頃はなぜ学習会があるのか知りませんでした。小学校５・６年になってから、そのことを考え出して、「ああ、私は部落差別をされていた地方に生まれたんだ」と言うことに気づきました。今思うことなんだけど、自分は差別されてきただけじゃなくて、自分も差別してきたと思います。「私は全然差別していない」とは言えません。みんなもそうだと思うので、みんなと一緒に直していきたいです。

TT(Ｅ男)僕は学習会に行っていて勉強とかもしたり、友達とかと休み時間に遊んだりしていて、ときどき行っていないときとかは先生とか友達がさそってくれて、今はとても楽しくなって学習会があったらいいなあと思います。

TK(Ｂ男)僕は差別に打ち勝っていく自信があると言ったけど、やっぱり差別というものにはなかなか勝てんとみんなの言ってくれた差別の現実を聞く中で思っていました。まだ僕には自信とか誇りとかなかなか持てない部分があります……。（涙）このことを考えると涙が目から出てきたり、鼻から出てきたりします。僕はこの涙を乗り越えていけるように今この授業を通して闘っているんだと思います。ＹＳ君とか、ＳＮ君とか、ＴＭ君とか、ＹＭ君とか、ＭＯ君とか、ＫＹ君とか、みんなの話を聞いているとみんなも自分自身と闘っているんだと思ったので、みんなで自分に自信や誇りを持ちたいと思いました。

YI(Ｂ女)私は初めＫＹ君はふざけていて嫌な人だと思っていました。Ｔ先生が、「ＫＹ君って本当は心のきれいな人」と言っていたけど、私はＫＹ君は本当に言いたいことをかくしているように思ってそう思いませんでした。小学校の卒業式の日にＫＴ君とＫＹ君だけ泣いてなくて、それだけ私たちに対する気持ちが少ないんだと思っていたけど、今ＫＹ君が言ってくれてそんなにつらい思いしていたんやなあって気づきました。ＫＹ君、ごめん。それと私は、話し合うとき今まで泣いたことがあったけど、もう絶対に泣きません。泣かなくても峠を乗り越えていく力が私たちにはあると思います。今日泣きながら言ってくれた人も、泣くのは今日を最後にして頑張ってほしいと思います。

NY(Ｂ女)さっき、ＴＫ君が言ってくれたことにつながるんだけど、私はまだ差別のことをあまり分かってないと思います。今まで自分は大丈夫と思っていろいろえらそうなことを言ってきた

けど、みんなの意見とかを聞いたら、全然自分に自信がなくなってきて、私はもっともっと頑張っていかなあかんと思いました。本当に差別とは醜いもので、……。前まではこんなに泣きそうになることはなかったけど、この全体学習で初めてこんな気持ちになりました。これからはまだ私は未熟なので、もっともっと意見を言っていかないと私の中の差別意識は絶対なくならないと思います。だからこれからはみんなで頑張っていきたいと思います。

T(TY)時間がちょっと気になるんですが、みんなの意見を聞いている中で、私の父のことを思い出しました。私は父のことを語ろうとすると涙が出そうになるんですが、……。私の父はきっと皆さんのおじいちゃんぐらいの年齢になると思います。その父ですが、心の中には差別意識がいっぱいで、自分の家とか家柄のこととかに誇りを持っていて、いつも私に対して「Yの家の人間として恥ずかしくないことをしろ」というようなしゃべり方をしてきました。私は私の誇りって何だろうかと考えたとき、家系とか自分の先祖のすごさを指していることに気づくんです。私はこの学習をしていく中で父の中にある差別意識に気づいていきました。私はそんな父に対して、学習会でいろいろ話し合ったこととか、全体学習で話し合ったことをずっと話してきました。私の父は、最初「そんなかっこいいこと言ったって、本音と建て前があるんだから」と言って、さっきみんなが言ってくれたおじいちゃんやおばあちゃんのように聞く耳を持たないという感じでした。でも私はずっと学習会に出る度に、また全体学習がある度に、私の中にわき起こってきた思いを家の人の語ってきました。その話をすると母は、「かわいそうに」って、「そんな思いをしている子には、何の罪もないのにかわいそう」って泣くばかりで、まだ同情の域を越えていかないんですけど、あれほど「本音と建て前じゃ」と言っていた父が、段々話を聞いてくれるようになったんです。この問題について夜遅くまで話をするようになってきたし、段々関心を持って、「今日の新聞読んだか。部落問題について書いてあるわ」って言ってくれるようにもなってきました。まだまだ父の中には差別する気持ちはいっぱいあって、「どこそこの家はどうだ」とかよその家のとこばかり言っている父で、父のことをしゃべるのはすごくつらいんですけど、そんな偏見の固まりだった父が、少しずつ変わっていくことをこの頃感じるんです。だから何人かの人が「家の人は分かってくれん」って泣きながら言ってくれたけど、自分がしゃべることによって自分が変わっていくように、家の人もちょっとずつみんなの思いを分かっていくようになるから、絶対にあきらめないで自分自身を鍛えていくためにも、話をしていってほしいと思うんです。みんなにはみんな自身を強くして多くの人を変えていく力があると思います。そんなみんな自身に誇りを持って、頑張ってほしいと思います。

T(KT)ひょっとしたら言わせてもらえないのではと心配していました。時間も過ぎてますけど、是非言わせてもらいたいと思います。みんな自身に打たれるものがあります。今みんなが一つになってこうやって腹の底にあることを語り合うことができる、本当にすばらしいことだと思います。先生にはこんな場面はありませんでした。そのために友達を一人失いました。高校入試という峠で大切な友達を救うことができませんでした。それは私自身が差別していることに気づかなかったためでした。私も小さい頃から言われ続けました。「あそこの子と遊ばれんよ」とか、「あそこは通られんよ」って、でもそのことの意味が分からないから「どうして」って言えない。親から言われたとおり、親の言いつけ通り生きていくのがすべてでした。おかげで友達を一人失いました。自分という人間が死んでしまったとき、その友達に一言言われました。「お前にわしの気持ちがわかるんか」って……。涙も出ませんでした。そのとき、私という人間は一度死にました。だけど、人間が生きていく中で知らないことがあります。知っていこ

うとしなければ分からないことがあります。知っていこうではありませんか。みんなで心の底にあることを語り合っていくことによって何かが分かってくる。今、ＴＫ君が言ってくれた。「部落の人間ということがつらいと思う気持ちの底には差別がある」って……。それは人間だれもが持っている心の中の葛藤だと思います。今語ってくれたＴＫ君の本心に響かない人間はいない。あのＴＫ君の言葉に響いてほしい。人間に上や下があるだろうか。私はみんなが板野南小学校を卒業するとき言いました。「学習会に行っている子は、差別されるために生まれてきたんではない。生まれてくることには価値がある。みんな同じ価値がある。その生きているという力をどうやって使っていくかが問われている。」先生はいつもそう考えている。本当にありがたいことにみんなの姿がキラキラ輝いて見えます。みんなと１年間一緒に勉強してきてよかったと思いました。森口先生の指導案の中にＹＩさんの生活ノートが書いてありました。「私が変わったのはＴ先生のおかげです」という文章。そんなことはないんです。先生も差別者です。差別してきました。おかげやと言われる人間ではありません。それはあなたの持っている力です。みんなの中にそんな力があるんです。人間は必ず変わっていける。お父さんやお母さん、差別のことを真剣に考えてきた人は少ない。そのことを真剣に話し合っていけば、人間は本当に人間らしく生きていくことができます。みんなが頑張っているように、今度中学に上がってくる６年生も力をつけていきたい。みんなも、自分に誇りと自信を持って頑張ってください。

Ｔ(KM)私は教師になって６年目です。初めて全体学習を経験させてもらいました。私は今まで生徒たちに気易く「頑張れ、頑張れ」と言ってきました。でも、今考えてみたら、みんなに頑張れと言えるようなことを自分でしてきたんかなあと考えたらそうではありませんでした。恥ずかしい話ですけど、私は今まで、部落問題の学習をしていく中でつらいと思っているのは部落の子だけと思っていました。でも、今日みんなの意見を聞いている中で、私の小さい頃を思い出してみたら、「あそこに子と遊ばれんよ」って、今もそんなこと、言われています。私の家はＫ町です。今結婚してＴ町に住んでいます。Ｔ町から板野中学校に来るとき、親から今も「〇〇の橋を越えたところを通ってないか」って言われます。そのことに対して反論はするんですけど、そのことについて母親と突っ込んで話をすることができません。もっともっと話をしていかなあかんことなのに、しっかりと話ができていない自分を恥ずかしく思います。それと今日の授業で、部落差別というのは、学習会に行っている子だけでなくて、みんなにとって重いものだということがよくわかりました。そのことを分からせてくれた皆さん、本当にありがとうございました。

Ｔ11：すばらしい仲間がここに集うたわけです。みんなを本当に大事にし合い、尊敬し合う営みを続けていきたい。そして、みんなが「今日も学校に来てよかった」と心の底から思うことができ、私にはこんな大切な仲間がいるんだ、一緒に頑張っていこうと思える関係をみんなで築き上げていきたい。もう泣かない。涙を振り切って、みんなと頑張っていこう。みんなで一生懸命に礼をして初めての全体学習を終わりたいと思います。